毎月十日廿五日發行

家庭雜誌

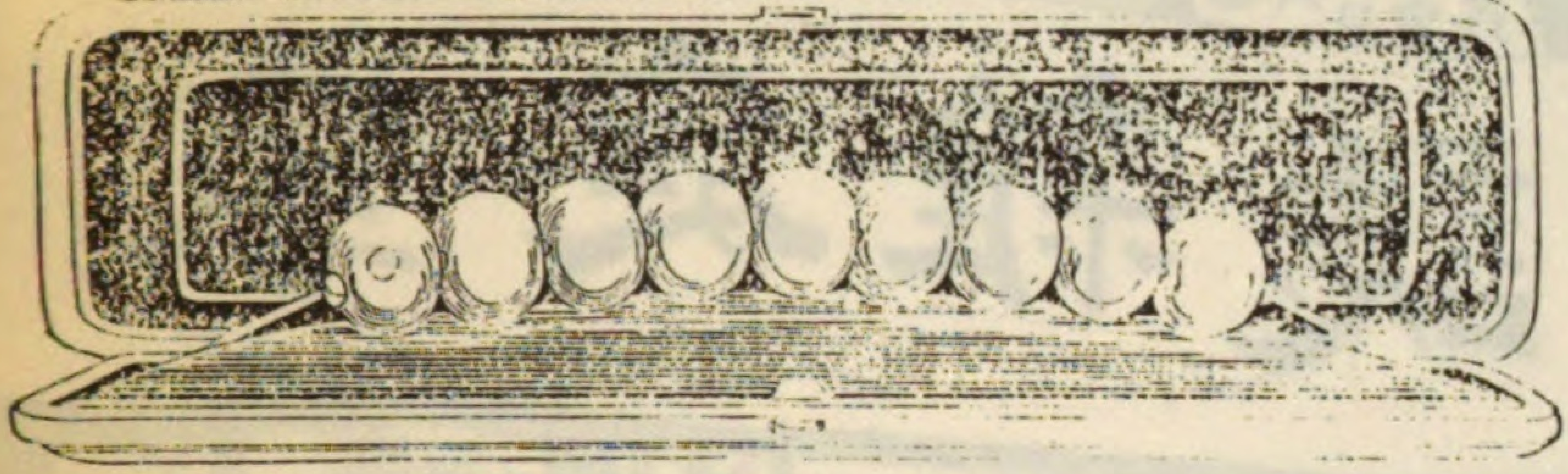
壹冊定價金五錢



明治二十九年七月十日發兌

第八拾壹號

專賣特許人造珊瑚珠



今般弊舗に於て發賣仕候人造珊瑚珠の儀は製作者多年の研究を以て始めて發明し專賣特許の榮を得たる者にして實に純粹の珊瑚珠と毫も異ならず從來の「ゴム玉」「明石玉」の如く卑しき品に無之古渡珊瑚珠特有の性質に至る迄化學の作用を以て其儘に模造し候へば質に高尚にして貴婦人令嬢方の御常用あらせらるゝも決して恥しき品にあらず玉類に鑑識ある人と雖ども決して眞僞を見分る事能はざる程に料巧精美を竭し殊に何年御使用相成とも變色の憂ひ無きのみならず永く御使用相成に從ひ自然光澤を増し恰も古渡り珊瑚珠と識別する事能はざる程にて實に不思議の製作なり且つ變色破損等なきは弊堂誓て保證仕候萬一右樣の缺點有之候節は何時たりとも御引替可申上候

但し取次御望の御方は兩店孰れへなりとも御便利の方へ御申越し被下度候

（注意）弊舗發賣の專賣特許人造珊瑚珠などゝ云ひ紛らし僞物を販賣するやに聞及候へば御購求の節は商標御覽の上御買求の程偏に願上候

爲替は下谷局並に神田局兩所宛郵券代用一割増

丸玉緒〆類 一個に付

〇四分玉	十錢
〇四分半同	十五錢
〇五分同	廿五錢
〇五分半同	卅五錢
〇六分同	五十錢

特別製 一個に付

〇四分玉	二十錢
〇四分半同	三十錢
〇五分同	五十錢
〇五分半同	七十錢
〇六分同	一圓

根掛九の玉 一掛

〇三分玉同	廿三錢
〇三分半同	六十錢
〇四分同	九十錢
〇四分半同	一圓卅錢
〇五分同	二圓

東京下谷池の端仲町二十九番地
貴金屬美術袋物商
玉寶堂 謹白
飯塚伊兵衛

東京市神田區須田町六番地
鼈甲珊瑚珠類小間物商
長岡商店 謹白
（電話三百五十番）

特約大阪賣店

橫濱市伊勢崎町
越後國中蒲原郡白根町
伊勢國津市立町
富山市大字總曲輪
京都市五條通高倉西へ入
名古屋市末廣町
武州川越町
札幌南一條西三丁目
取次所市内各小間物店にて販賣す

保招堂

高田五郎
富井久平
麻物商店
西田美信
北村政七
近藤太衛
山田屋周次郎
野原昌之

第二 **一語千金**

定價五錢 郵稅二錢

歐米名家が、片言隻語宇宙の眞理を説明し、造化の秘奥を闡明し、以て諭すべく、以て味ふべく、咀嚼愈々精なれば興味愈々深し、所謂る一語千金なるもの、此書が如何に有益にして、江湖諸君の愛好に投じたるかは、第壹一語千金が既に八版を重ねたるを以て今更喋々を要せず、今や部門、躰裁總て同一なる、第貳一語千金を發刊せり、乞ふ愛好の諸君一本を坐右に供せよ、

夏季發兌國民[illegible]

家庭の和樂

夏の家庭

簡易料理

家庭衛生

海の日本人

簡易生活

娯樂倶樂部

歴史の片影

近松門左衛門

定價十錢 郵稅二錢
定價十錢 郵稅二錢
定價十號 郵稅二錢
定價十錢 郵稅二錢
定價十錢 郵稅二錢
定價二十錢 郵稅四錢
定價十八錢 郵稅四錢

第一國民小說

第二國民小說

第三國民小說

第四國民小說

第五國民小說

第六國民小說

第七國民小說

風雲漫錄

征塵餘錄

定價十五錢 郵稅四錢
定價十五錢 郵稅六錢
定價十五錢 郵稅四錢
定價十五錢 郵稅四錢
定價二十錢 郵稅四錢
定價十五錢 郵稅四錢
定價十五錢 郵稅四錢
定價十五錢 郵稅四錢
定價十五錢 郵稅二錢

發兌元 東京市京橋區日吉町四番地 **民友社**

THE TWELVE MEN OF LETTERS
拾貳文豪

號外

緒方維嶽著
シルレル

定價拾八錢
郵稅四錢

◉早稻田文學評　『シルレル』『十二文豪』の號外なり躰裁總て他の號に同じ、文章も結構も、はた其の出來榮も、他の號に比して、伯仲の間と評すべし、總じて『十二文豪』の最長所は、其の文の花やかにして言ひまはしの巧みにして、多少の直譯的文病あるに拘らず、一たび卷を開く者をして、知らず〳〵全卷を讀了せしむるの才藻にあり、而して此の篇の如きは此の長所を具へたるが上に、諸書を參照せられたりと見えて、主人公が性行、著述に關する評論も(語に泥まずして意を酌めは)おしなべて穩當中正、此の書はた青年社會の文庫中に列すべきもの

◉文學界評　十二文豪の號外として民友社より出版せられし「シルレル」は緒方維嶽氏の新著なり。こは同氏の處女作なりとか聞けど筆趣清新同情湧けるが如く、風土人情歷史等趣味全く異なれる西洋の事物を材にして讀者の眼前に彷彿せしめ毫も難澁の痕をとゞめず。此著シルレルの學殖と彼が詩品の眞位地を傳ふるに於て、或は彼が美術上の意見を評するに於て、彼が自然觀を寫すに於て、猶一層の研究を要すべきものに思はるれど、詩情彼の如くにして、敬虔、彼の如き人物を傳ふに於ては著者はたしかに有益なる成效をなせり。一卷の十二文豪豈にゲェテを盡さんや、豈にシルレルを盡さんや、著者いよ〳〵勉めて止まずんば其造詣また知るべからず。請ふ勉めよや。

◉青年文評　シルレルの傳記は最も興味ある者の一なり、彼が少年時代の大膽なる冒險談は、ことに青年書生の爲に欣ばるゝ者、今緒方氏に譯せられて、外國語を知らざる者に紹介せられぬ。其内容に對する詳細なる議論は他日に讓りて、未だ此大詩人を知らざる、外國語の智識なき青年諸氏に、此趣味多き詩人の片影にだに接せられんことを勸む。

發兌元　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

明治廿九年七月十日發行

家庭雜誌第八拾壹號

目録



家庭雜誌第八拾壹號

（明治廿九年七月十日發兌）

社說

必要品と贅澤品

世の中には必要品と贅澤品とあり、社會の進步するに從ひ益々其の區別の著しきを見るなり、必要品は人間の眞實なる生活に從ふものにして、例せば吾人が日日用ふる所の米の如き、家の如き、衣服の如き、皆是なり、是等は人類に一日として無くてはならぬ必要品なれども、食事も、家屋も、衣服も、次第に贅澤に赴くは、蓋し人情の然らしむる所にして、亦人情の弱點たる所なり、粥を啜りても人間の眞生活を爲すに差支なきも、珍膳佳肴ならざれば食するに堪へずといふは我儘なる事なり、九尺二間の長屋に住ひても、人間の生活を爲すに差支なきも、大厦高樓ならざれば、住むに堪へざるといふは、我儘なる事なり、布衣短褐を着ても人間の眞生活を爲すに妨げなきも、羅綾錦繡にあらざれば、着るに堪へずといふは我儘なり、凡て我儘なる事は、眞生活の許さゞる所にして、抑亦世に罪惡てふものゝ起る源なり。

然ども吾人が茲に贅澤品と稱するものは、何事も疎惡なるものを撰び、高尙なるもの、優美なるものを避くるといふ意味にはあらず、また國民の生活の度を低くせよとにはあらず、吾人が眞生活の目的は凡て必要の所に就き、無用のものを去るにあり、さて如何なるものが必要品にして、如何なるものが贅澤品なるか、吾人は悉く言ふを欲せず、是より記する事實を、讀者の一覽に供せん。

本年五月國民新聞記者金子佐次郎氏其筋の忌諱に觸れて獄に下る、一ヶ月半間此の忘れられたる世界に於て

見聞したる内に聽く事あり、同囚の内に樽柿の萬と綽名せらるゝ男あり、此男自由なる社會にありては、晝夜の區別なく常に酒浸にして、樽柿の口氣を發するを以て此名あり、彼は飯よりも何よりも酒が大好物にて、酒を以て三度の食事とするに至れり、然るに囚人となりてより彼の嗜好も、習慣も俄に激變せざるべからざる場合となりぬ、獄中にては酒は勿論禁物にして、三度の食事すら其の飯量の少きに苦み宛然餓鬼道なり、而して獄中にて晝夜ともなく彼が腦裏に往來するは、大好物の酒にあらず、酒の事は酒の味は一切知らざるものゝ如く、夢に現に見るものは、只管食事のみ、飯のみ、御菜のみ、彼自ら同囚に向て曰く、今玆に正宗と牡丹餅を並べ、何れかを取れといはゞ、我は直ちに牡丹餅に飛付べしと。

此の話を以ても何が必要品にして、何が贅澤品なるかを知るべし、吾人は更に多言を須ゐず。

時鳥いかなるゆゑの契にてかゝる聲ある鳥となりけん

（西行法師）

科學

海嘯と地震

松ヶ枝女

去月十五日の夜而かも舊暦端午の節句に當つたので祝ひの筵に笑ひ興じて居つた都遠き三陸の東海岸なる幾多の漁村を一夜の内に跡かたもなくさらひ去り幾十箇の村落を修羅の街と變じ去らしめ二年間の日清戰爭で討死した人數よりも多くの人靈を一夜の内に暗い〳〵海の底に葬つて幾千といふ家は空しく壞れなば何千といふ怪我人があるそれにその結果がまだ樣々の害毒を持ち來ろふとして居るといふ實に恐ろしい話なかなか無い事で筆にも口にも盡されない悲酸の珍事は皆樣

が已にお聞き及びになつた處ですさてこの恐ろしい出來事は何であつたといふに三陸の東海岸に非常なる海嘯があつたといふのですさてその海嘯とは何でありませうか。

海嘯とは大波濤が陸地を犯して來て家でも人でも獸でも當り次第に引きさらつて甚しいのになると即ち右のやうな慘狀を來たすのです。

海嘯の起るには噴火—洪水—大風—地震など樣々の原因がありますが海岸の陸地に大地震のあつた後には大底海嘯が伴ふものだと申します縱令ば貞觀十一年陸奧の國に大地震があつた時海潮が漲ぎつて見渡す限りの陸地が海のやうに成つて幾千の人が溺死した事又千七百五十五年にあつたあの有名なリスボンの地震の時澤山の人が破壞する建物に潰されぬやうにと思ふて辛じて海岸に逃れて來ましたのに高さ九丈もある大濤が搖つで來て折角地震の口を逃れた人も家も皆亡ぼして仕まふた事又今から二十八年前に南亞米利加のペルーといふ國に大地震があつた時も大海嘯が次で來てアレカやイクーカなどいふ市街はすつかり跡かたもなくなされましたさてこの時の海嘯の餘波は僅か十四時間の内に太平洋を横ぎつて一萬哩も隔てある我國の海岸に來たといふ事です。

然し海嘯は大地震の後に計り起るとは申されません我我の住んで居る地球が澤山の地層から成り立て居る通り海の底にも地層があつてその地層は處によつて硬くもあり軟くもあるのです時によると他の軟かい地層が海潮に洗はれて如何なる機かその地層の或る部分が破られる即ち地層が陷落すると潮水はどつとそこにつき込んで參りますが非常な勢で浸入した水は勢ひ又跳ね返つて參りますさてその跳ね返る時波濤は四方に傳播するので陷落した地層が深くつき込んだ水勢が強ければ強いほど海面に搖り動く濤の勢も強いのでこゝに

即ち大小の海嘯を來たすのです。

前號の家庭雜誌に一寸揭げてありましたが今度三陸の海嘯の原因は日本の東海岸線の間にあるトスカロラといふ世界中最も深い海床の或る地層が陷落したる、によるといふ事です。

大海嘯の起る前には幾分か氣壓に變化がありますが海嘯のあるといふ確定の附くほど判然した異象は分かりません實は澤山の學者たちが熱心に硏究して海嘯や地震の判然した原因を見出そうとして居るのですが未だ充分の結果がないのです。

さて次に地震の事を述べませう。

地震とは强弱にかゝはらず地層の或る部分が震動する事をいふのでその波動の烈しい時は陸地にある物躰はは忽ち壞されて多少の損害を免れません又甚しいのになると大な都會でも何でも地の下に落して仕まふて海となしたり砂の下に埋めたり實に驚くべく恐ろしい仕業をするのです安政の大地震は記錄でお讀みでせようう近くは尾、濃、酒田の震災など身の毛もよだつ思でやありませんか昔イタリヤにポンペーといふ誠に美くしい都がありましたがチーブル火山の噴火した爲めに全部殘らず砂の下に埋められて近代になつて漸くその遺跡を發掘したといふ仕末です。

どうして地震が起るかと申せば重なる原因は先づ火山の破裂、地層の陷落、地球內部の地辷りなどでムいます。

(1)噴火山が破裂する時には大底必ずその前に地震がありますがこの場合には噴火口から噴出が始まると地震は止みまする　(2)又噴火作用が停止する時には不幸な地震に續かれる事が屢々です、第一種の地震の原因は地球の熱い內部にある蒸氣や瓦斯が膨脹して爆裂するのに因りますし第二種の場合の原因は地球の內部が冷却して縮少するのに因るのです。

何處の國に參つても多少地震のない處はありません埃及と中國はまあ他に比べては殆んど無いといふてもよい程少ない處ですが猶十八世紀の前半期に一度大きなのに犯されたとが記錄に殘て居ります或る學者の研究によれば地球上每年必ず十二度か十三度は多少人畜家財を亡ぼして災する地震がありたゞ普通の地震は絕へず地球の何處かに起つて居るといふ事でず。

且つ地震の最も多いのは火山國です日本などは著るしい火山國ですから從て地震も亦實に多く微か震動をも合すれば每日一回と三分の地震があるのです近頃の調査に據れば古來大地震といふべきものは平均十二年半に一回の割合なそうです。

日本も西南地方は地震が少くて弱く本土は多くて強く殊に關東平原仙臺、美濃、尾張などの地方は最も多い臺灣も火山も多く地震も多いと申ます。

地震は四季の中冬に一番多くて且つ滿月のときによく起るのを見まするど太陽と月の引力が地層の激動を增して震動を屡々さするに至らしむるのかと考えられます。

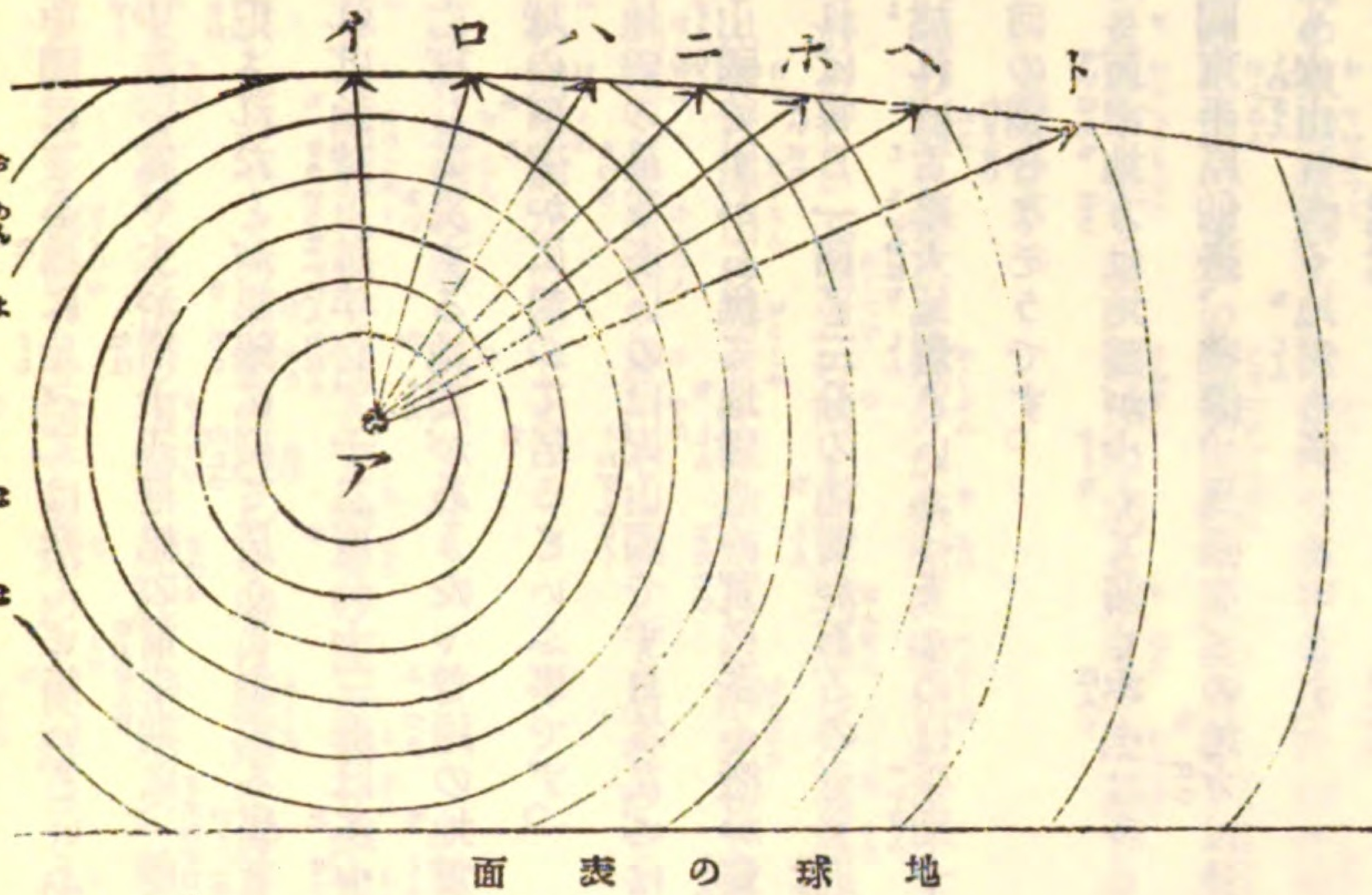
地震の波動の速力は樣々です硬い地盤の處では緩い處より速力が烈しい精わしく調ぶれば平均一分時間に十九哩の割です。

地震の搖り方はその地震の起つた中心點から樣々なる方角に從て樣々あります。

次の圖を御覽なさい縱令ば地震の中心點が「ア」にあると致しましやうすると波動がその「ア」の丁度上に當る處の地面の「イ」に屆くとき動搖は垂直即ち上下に動くのでこの時は災害が甚しいから充分用心しなければなりません。

「イ」から幾何か距つて「ホ」「ヘ」「ト」の方角に參りまするど最早上下には搖りませんで水平動即ち橫に搖れるのですこの時には先づ比較的に災が少いのです。

地震の中心點の直上から少し距つた處恰も「ロ」「ハ」の



處では上下にも動くし横にも搖れますからこゝが一番危くて一番恐ろしい災をいたします。

時によると地面が捻られて捲き廻はされるとがありますこの場合には建物などたゞ打ち潰される位の騒ぎではありません大な家屋でも丸で倒さまに引つかへされて壊されるのですこんな地震はもとより至て稀れですが前に述べた種類よりじつと恐ろしふムいます。

地震の前には地鳴りのする事が間々ありますその響は或る時は敷石の上に重い荷車を挽くやうな音であつたり又或時は大砲を放つやうな音がしたり水の中に焼鐵を入れた時のやうな音のとも又時には遠くの雷のやうな音がする事もムいます。

然し地鳴りがしないで地震のある事があるやうに地鳴りがして地震のない事もムいます南亞米利加の或る部分なぞでは時々大きな地鳴りがして少しの地震もないとがムいます丁度五月の頃でしたある日番丁に居りました時遠くの雷のやうな地鳴りがしましたから多分地震があるだろふと思ふてその一二日用心しましたが遂何もありませんでした。

何處の國に參りましても地震が海、川を埋めて陸としたとか陸地が陷されて海や湖になつたとかいふ言ひ傳があるものです、が地震は實に不思議な事を致します眼に見ゆるのと早速見えぬとの相違こそありますが地震は常に地球の表面に變化を與へて居ります。

草　市

今年は征蠻軍の名譽ある戰沒者の初盆なればとて草市の景氣至つてよく十二、十三兩日淺草觀音の草市に張店の數は一番より六番まで四百三十九人の申込あり地割は來る五日にして品物多き方なりたゞ蓮の花と葉玉蜀黍は外れの方大鉢の相場二割方高しといふ

史　談

土方歳三の少年時代

冷月生

上

花を浮べし德川の流れの末荒浪立ち騷ぎて、二百六十餘年は名殘の夢となりける時、武士道の意氣地を立て貫きて、板橋の草に赤きこゝろの血を染めたる近藤勇の名を知る人は、函館の浦吹く風に露と消えたる土方歳三の名を忘れざるべし。

勇と云ふ名は歳三によりて人に知られ、歳三の名はまた勇の爲に世に顯はれたるは事の實にして、こと〱しく異朝のためしをならぶるまでもなく、維新革命の歷史を讀みたる諸子の知る處なるべし、されば勇と歳三とはいづれ骨肉の離れ難き間柄なれば、歳三の事蹟をとふらはんには勇の傳を知らざるべからず、勇の傳をものせんにはまた歳三を伴はざるべからず。

勇の少年時代は己に親しき我友の中野三鷹子のものせられたれば、予はこゝに覺束なくも歳三が生立ちの有樣を叙して諸子に見ゆることゝはなりぬ。

勇が產聲をあげし北多摩郡三鷹村字大澤を距る西南二里、南多摩郡桑田村もと石田と云ふ所あり、調布やさ

らす玉川の南岸に沿ふて桑田麥隴の間茅屋點々見えつ隱れつ、移り行く世の古は帝都及鎌倉へ通じ、東奥北越の二道共に此地を經ざるなく、さしも繁華を窮めし國道も今は草深き畦の小路と化し、平將門が置きしと云ひ傳ふる小山田の關は、逢ふことを苗代水にまかせてぞこさんこさじは小山田の關とは爲世卿が詠し歌の天主臺とのみのこりて跡は桑田麥圃となり、血に啼く山時鳥、花ちりて跡なき百草、向ヶ岡の青葉若葉、濁らぬ玉川の水の色と共に古をとゞめ、小高見に登れば、白―青―ともに不斷の富士と關東は州の諸山双眸のうちに入る、嗚呼この仙郷は一世の偉人土方歳三義豐が呱々の聲をあげたる地なりけり。

歳三の父は土方隼人義諄とて、先祖より此地の名主を世襲しけるが、その性質温良にして慈愛の心深く、法度制規は繩墨に拘はらず寛仁簡便をむねとして、常に經濟を說き業を勸め、貧を救ひ孤を恤み、役目を笠に威權を擅にする如き振舞は少しもなければ、部下の百姓みな其の業に安んじ、義諄をば神か佛の如くに敬ひける、同じ郡の今は七尾とも高幡村の舊家久野久次郎の娘お悦を妻りて四男一女を擧ぐ、長男爲次郎は少時眼病に罹り、不幸にも兩眼明を失ひて終世世に拗ね、次は隼人義嚴とて兄に代りて家督を受け、名主の職を襲きて功績父祖に劣らず、當代の主人隼人義弘は其の男にして歳三の甥、温厚篤實の君子なり、三男良順は出でゝ北多摩郡染谷村の大家粕谷氏を繼ぎ、次は女子にて名をとくと呼び日野の佐藤氏へ嫁ぐ、末に生れ出でたるは即ち歳三義豐なる。

父の義諄はかりそめのいたづき次第に枕の重り行きて藥石按鍼も其の甲斐なく、世俗にいふ厄年の四十二歳を一期として頃は天保六年の二月、溘焉呼ぶも醒めざるの永眠に就きたれば、未來の偉人が呱々の聲を聞かず、翌七年の正月歳三は生れぬ、草葉の蔭にていかば

かりか口惜しかりけむ。
歳三生れながら肉豊かにして骨格太く、面構え逞しく如何さま一癖あるべしとぞ思はれける、でん／＼太鼓の守唄に快く睡りて乳吞む夢の頃、過ちて大地に落されし事も度々ありしかど、泣かぬのみか涙一粒も見せざりしと云ふ、誕生前より能く獨歩きして三歳の頃よりは乳房をば見もかへらで飯を好みければ人皆奇しき思ひをなして鬼の子よなど云ひて興がりけるとか、四五歳の頃より躰軀急にのびて同じ年頃の子供よりは一かさ大きく、氣は成人を呑みてひとを人臭しとも思はず、強情我慢にして何事にまれ人に後るゝをきらひて、如何なる場合にのぞみても負くる逃ぐる叶はぬ抔の言葉は歯よりも外へ出すを恥とし、人の云ふをさへ忌みきらひぬ、兄が書きて與えたる手本は習はんともせず、草紙に墨くろ／＼となすりては表に飛出し、里の悪太郎を相手に石擲げ棒打ち、よその見る目も危き遊びのみして荒れ廻り、飯を食ふこと日に六七度、母親の甘き手一ッにて育てたる子は、あれ見よ、後には天晴れの白癡となりすますべしと人に後指さゝれて、其方のみか母兄姉までも笑はれなん、ちと大人しうせよと母が日毎夜毎の折檻物ともせず、兄姉の諫は溜頁耳にも入れで萬事己が思ふまゝに振舞ひければ、もてあまして成人の後は如何なるしれものになるらむと行末を氣遣ひぬ、されど餘の悪太郎とは大に其の趣を異にして、粗暴我慢と見ゆるうちにも沈着の風ありて常に仁義を先きにして之れを欠かず、約束を重んじて之れを忘れず、妄りに怒を發することなく、物に動せぬ大器宏量おのづ英雄の眞相をあらわし、非凡の風采を具へたれば密に畏を懐きし人もありける。
歳三五ッの時兄巳順と共に一里計り距れた本宿といふ處へ使に行きしが、近路せんとて渡場へは廻らで、棊内知りたる玉川の淺瀬を拾ひて越しける、若一歩を過

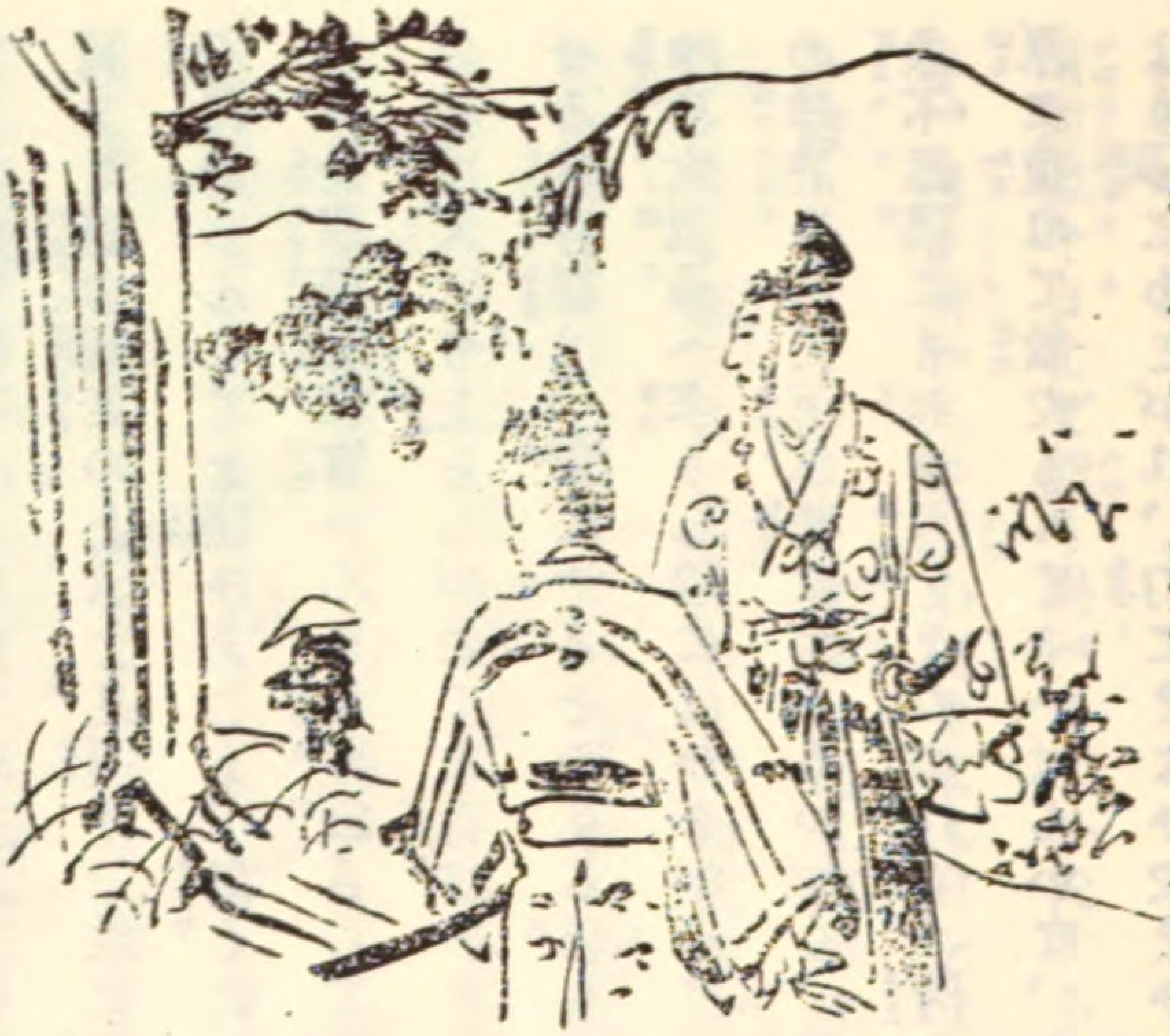
らば一大事兄が背負ひて越さんと云へば、否とよこれしきの河越すに何の手間ぞ、人の肩腰借るに及ばずと先に立ち、衣を褰げて打入りたり、兄は周章て危し待てと叱れど止まらず、さなあやぶみ給ひぞ、流さるれば死ぬまでのことなりと云ひ放ち、滔々として目くらく許りの急流を恐しともなく打越えて難なく向ふの岸に着き、冷かに見返へりて早く越したまわずやと云ける樣憎々しきまでなりしと。

此年の六月洪水にて玉川の堤防悉く破壞しければ江戸より數人の役人下向して歳三の家を宿とし、村方の百姓から催して其の修覆を急ぎける、或日役人衆、奧の椽に腰打掛け午刻の調度をしたゝめ居たるが、庭の片隅に樫の大木一本ありけるを見て、尋常の樫にはあらず、稀なる良材なりといたく賞めけるを歳三聞きてつか〳〵と進みより、お侍此を曲れば藥店ありと（歳三の家は賣藥を營む、今も猶營業す）玄關前を指して、樫の木よりまだ賞むべきものあるを知りたまはずやと云はぬばかりに云ひければ、人々笑ひ興じける、役人のひとりは歳三の頭を撫てゝ、よき子よ、菓子にても買へかしと燧袋より錢取出して與えけるに錢は欲しう候はず、と否みて取らず、然らば欲しきもの何なと望めよ、買ふて得させんと云へば、否、別に欲しきものも候はず、と答えて傍のひとりが楊子削る小柄に目を注ぎぬ、これ欲しきかと與ふれば喜ぶこと一方ならず、母は先の程より小供とて無禮の振舞ありてはと氣もおろ〳〵、其處退けお辭儀せよ、お禮申さずやと叱るやうに云へば、後の日厚く酬ゆることのあるべしと冷かに云ひて頭を下げず、傲然一笑してやをら立去る後姿見送りて役人の面々は顏見合せ、凡庸の子供なれば恐れ戰きてあたりへも寄付けぬに、人を人臭しとも思はで年に似合はぬ大膽不敵の振舞、さても末おそろしき小童やとつぶやきける。

文藝

六代君（二）

其村子



峨々たる高雄の峻嶺にきたひ上げたる文覺が鐵脚は、まさに千山萬岳をも踏破るべし、坦々たる東海の道、たとへば疊の上の如し、何程の事かあるべき、遠しとも相州の鎌倉まで、急ぎに急ぎ、ひた急ぎに急ぎ急ぎぬれば、往還四日を出でざるべし、源二位いかにかたくいひ張るとも、二日の辨を費やせば是れも足るべし、されば併せて僅かに六日なり、七日目の曉には大手を振つて京の町中、四方八方にはせ廻るとも、誰か是を咎むべき、是こそは平家の嫡流小松中將の忘形身六代君に候と、よしやよし名乘をあげて歩くとも、道の邊の草の葉に置く白露の露程も、氣遣は更にあるべからず、此旨落もなく母御前に傳へて、日頃重き思ひにひたとふたがり玉ひぬる御胸を晴しまいらせよや、且は又九十九折の岨路を物の數ともせず、茨萱原をかき別けて余が草庵にまいりたりし彼何某のはしためにも、此事語り聞せて喜ばせよ、大地を打ん槌こそたとひはづるゝとも、文覺か此言葉ゆめ〳〵はづるゝことあるべからず、汝等も亦此心して疾々行けよと、上人の言葉に齋藤五六兄弟は、生かへりたるがごとくに喜び、ひたすらに上人を、正眞の大聖不動明王と、三拜九拜禮拜して、

急ぎ大覺寺に行けよとすゝめ玉ふをも聞かず、逢坂の關まで鎌倉發足の上人を見送り、茲に猶も呉々と事の全たからんことを願ひきこえ、漸くにしてたもとを別ち、此事母君に傳へんと北嵯峨さして急ぎ行く、兄弟の心は天にも上らんが如くに喜びいさみ、いそ／＼とせる其有樣は、實によその見る目もよろこばしく、昨日六波羅へ來りし時にはひきかへて、たとへば屠所の羊許されて再び檻にかへるが如く、偖は又俎上の鮮魚不思議にも利き刄をまぬがれて、清き住居戀しき海原に重ねて放たるゝともいはんかな、さるにても昨日より夢にあこがれ、幻にまよひたまひぬる母君をはじめまいらせ、姉夜叉御前より、はしための童に至るまで、此事傳へきゝつれば如何に喜こびたまはんと、思ふにも實に先だつは涙なりけり。

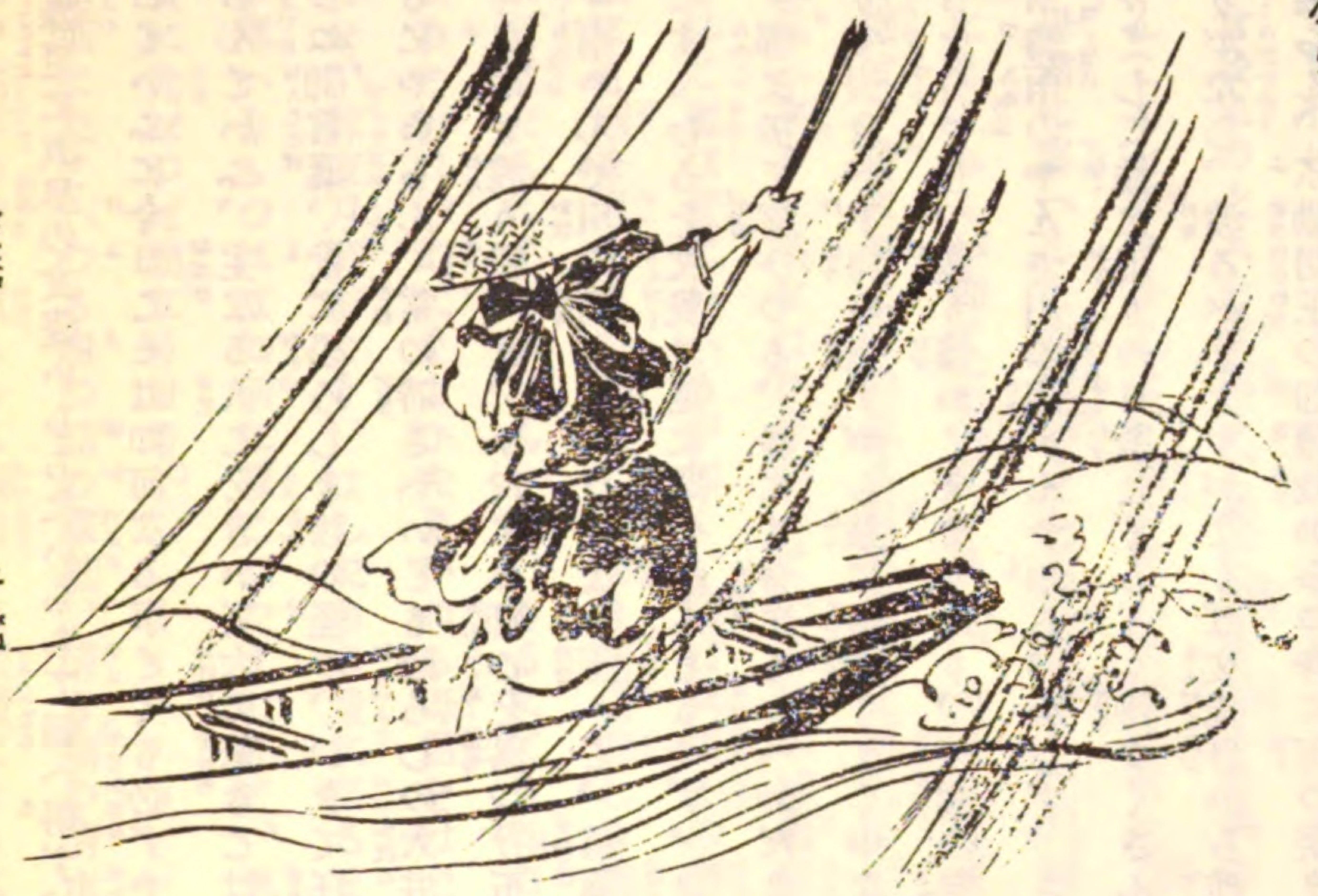
八葉の蓮華にたとへつる四つ緒の草鞋、清き關の清水に濡ほし、往手の雲を佩さめる戒刀もて縱横にきりなびけきりひらき、粟津の松原瀨田の橋と打過つ打渡りつ、驛路其數を重ね／＼ていよ／＼ゆき／＼、今や近江路もやがて盡はて、伊賀の山越より神風の伊勢路を過ぎ行くに內外の宮居はるかに／＼伏拜み、願はくは六代が一命必らず助け玉はれかし、神慮源二位が心にやどりて、此事叶へ玉はれかしと、心盡しの祈願をさゝげ奉つり、山鳥の尾張とすぎ三河とゆきて、こゝは遠江の境、名にしあふ海道一の難處と聞えし、大井川のこなたに來れる折節、何とて天道のかくもつれなき、降る雨の今日の終日小止なく、水嵩いや增にまして渡るべからずとの言に、はやりにはやる文覺も是を如何ともするに由なし、峻嶺嶮嶽よしやいかにさがしくとも越へなんとすれば越へもすべし、されども是はさる事の更にかなはず、今日と暮れ明日とむかへてひたすらに川の開きなんことをのみ、待つ日は思ふより早く暮て、早三日といふと重ねつれども、雨はさらにやま

んともせず、されば又川の開きなん氣色も更になかりしかば、殊更に氣早の文覺いらちにいらちて耐へ得ず、其四日目といふに今日こそは如何なる事とても必ずや川を渡らんといふ、主なる人こをきいて大に驚きこは思もよらぬ御言葉、世に恐ろしき物の怪の、つきて狂はせつるにやあらん、常の時さへいとも恐ろしの大井川何條今日など渡り得べき、ひたすら御心を落つけ玉ひ、唯々雨やんで川の開きなん日をまち玉へと、言葉を盡してすゝむるを文覺は更に聞いれんともせず、日數を限り都に於て誓ひつる、身にも命にもかへがたき大誓ありて鎌倉へ下向の道すがら茲に事故もなく少なからぬ日を費やし、殘り僅かとせまりたり、天候の定めなき何時雨のやんで川の開かんや知るべからず、されば悠々として茲に限りの日數ことごとく待つくさんやも計りがたし、渡るべきよすがなくば文覺自から渉いでも渡らん、不動明王の加護淺からぬ身に何の誤まちかそれあるべき、よし又運拙なくして底の水屑ともなりなんには、是ぞ大願の叶はざる天の告更に恐ろくべきにあらずとて、上人あやふしてひきとむる人々の手をふりきりて、しとゝ降る雨中を急ぎ川側にまではせつけたり。

降る雨を集めて早き大井川の激流、滔々として一瀉まさに千里の遠きに達すべし、幅廣き兩岸に滿々て眺めはるけく、濁浪雲より出で、又雲に入る恐ろしの有樣、誰かそれこれを凄きじとながめざらん。

何處より得來りけん長さ二間餘の小舟、櫨を押しきつて此激流をむかふの岸に達せんとするものあり、身の丈は七尺にもあまらんばかりの大法師、墨染の衣の袖高くまきあげ、茫々たる髯を風にふかせ、ふる雨をさやかなる檜笠にしのぎ、三尺にあまる戒刀を前下りに佩なしたる、いとも〳〵神々し、是ぞこれ問はでも知るべし、都の片ほとり高雄山神護寺の荒法師文覺上

入其人なり。飽までもそを止めんと追ひ來りたる宿の主は、唯茫然として今や岸をばなれて六七尺、一丈にも達せざるにはや押流されんとする小舟をながめて、



あれよ〳〵とつぶやくのみ、上人は力を込て櫓を押ながら例の大音、破鐘のなるが如き聲張あげ、河海を守る八大龍王は何處にある、末世の護法者高雄の文覺今や此大井川を渡るなり、手下の小龍王どもにいひつけて、はやく〳〵此疾流れの勢をしづめ、難なくむかふへ渡すべし、尊とき院の御所さへも恐れざる文覺なり、今萬一に此舟を押流し、さては又覆すなどの事しあれば、直ちに汝等龍王の住居に行き、荒れて〳〵荒れまわり、城門樓閣の別なく手あたり次第微塵となすべし、其時後悔せざる樣今においてよく〳〵思ひはかるべしと、日月の如き兩眼をはつたと見開き、川の表を睨まへたり、此恐ろしき人に睨まれたらんものは、よしや猛き獅子にてもあれ、虎にてもあれ、いづれか恐れ戰のかざらん、されども心なき大井の川水はそを恐ろしと思はざるにや、流れ滔々として更にやまず、小さき舟に集まり來る勢の凄まじさたとへば果てもなき

凩の枯木の枝をうつがごとし、すごしとも恐ろしとも言葉の及ぶべきにあらず、見る〳〵うちに小舟は遂に押流され、行先は何處とも白浪の中にまかれ行く有樣に主は弱き心を消し、はや此世になき人なり、さても〳〵氣の毒なる事よとて、合掌して一遍の稱名、ひたすらに上人の冥福を祈りける心の程こそいと殊勝にも難有けれ。

海道筋を去ること凡八里の川下に、成瀨里とてさゝやかなる小村あり、戶數殆んど二三十、茅屋稻田の間に三々五々と散在し、誠に朴納素野の風習は葛天氏の民と人の許せし、村の西端や、川岸に近きあたり、萬壽山寶仙院とて方丈の草庵あり、安置し奉つる本尊不動明王はかしこくも弘法大師の作なりと緣起の卷に詳しく傳へ、靈現いともいやちこにして參詣の道俗ひきもきらず、住職の沙門觀心法といふは今年すでに六十路にあまれる老僧なり、童顏鶴髮にして道心いともかたく、誠に尊き人なりけり、今朝しも降る雨の少し晴れて川水も少しひきしと人のいへれば、其樣如何にありなんと唯一人川の邊に來り、見やるかなたの杭にかかれる黑き物あり、何にありけんといぶかしみつゝやや其方に進み行き、よく〳〵見れば一人の旅の僧なり、慈悲ふかき觀心法師いとも憐なる事に思ひ、如何にもしてこを助け上げんと急ぎ村に立かへり、此由を人々に語りければ、一同頓に集ひ來り、或は竿竹たくなはなど、種々樣々の道具を持來りて百方其手を盡し、漸やくにしてひきあげたり、少しは賴みあるべくも見えたりければ 人々大きに力を得て、焚火よ藥よと介抱いたらざるところなき其甲斐ありてうれしきかな、彼僧忽ちに息ふきかへし、いとも不思議なる面持にて、抑玆は何處にて、我を助けしは誰ぞと問ふ、玆は是大井川の沿岸にして成瀨の里といふ處なり、滿水の凄まじきに流れてや、御身彼處の杭にかゝれるを見つけし

かば、いかにもして助けまいらせんと我村の人々を促かし催ほし、漸くにして引上げたり、手立むなしからずして、斯も蘇生したまいつることのうれしさよ、見まいらする處急ぎたまふ旅の裝なるが、何國へと志ざしたまふにや、あまりに急ぎたまふならずば、今日より暫が程は我草庵に足を留め、ゆる／＼疲れを安めたまへ、此川水に押流され、押揉れたる事にしあれば、いかで身のつかれざる事のあるべき、さればたとひ急ぐ旅にても少しの猶豫あるべきこそ誠に御身の爲なるべしと、老僧かいとも情ある言葉、一々にうれしく聞なし、此度急ぎにいそぐ所用ありて鎌倉に下向の折節、此滿水に支へられしをいとも／＼齒痒覺え、人の强いて止むるをもきかず、汎々たる一葉の舟にいづならはじの艪を押して、滔々たる此激流を渡らんとせしことこそ我身ながら偖も大膽不敵誠に愚の至りなり、中流にして一擊の濁浪に捲れたる後は恍惚として更に覺えず、我身たゞに果てなんにはそれがために情なや、憐なる人々の命にもかゝるべきを、難有や嬉しや、御坊の情によりてかく蘇生なしたることこそ實に忝なきの限なり、何をか包まうすべき、我こそは都高雄山にこもり、松風蘿月を侶として其日を送る沙門文覺法師なり、と聞終りて老僧をはじめなみ居る人々、さては今世に其名たかく、牛打童も知らざるものなき、御坊にておはしませしかといよ／＼尊みかしづき如何にもして暫らくはとゞまりたまへと、ひたすゝめにすゝめけれども、滿水の大井川を渡るまでにいらだてる文覺何條かゝる言葉に耳をかすべき、最上無二の高恩御禮は又重ねて、今はこれにて別れまいらせんと老僧をはじめ村の人々にも一禮なし、やをらたち上りて急ぎ行く

都夏月

桐廼舎女史

晝の暑さは影もとゞめず水の如すみ渡りたる空に月のみふねの浮び出ぬるこそあかすをかしけれ。いでと筆とりて何をかもと思ふほどに何處とは知らず笛の音の涼しう聞ゆるに、小鹿鳴なる山里の秋のあはれも思ひやられてそゞろに麻の袂も露けくなりぬるを、かたへに手習ゐつゝありしめの童のあやしとや見けん、何にか思ひいりたまふぞみこゝちやあしきと問ふ、いなとのみこたへしにさらばくしたまひぞ今宵は風も涼しきを、外に出給はずやとまめたちていふもいと〱愛らし、さはとて文机おしやりて引かるゝまゝに大路に出れば、住なれし身にも見る毎に驚かるゝは都の賑はひ成けり、まして氷ひさく家は今めかしう清らにつくりなしてなまめきたるをとめのあかきたすきひきゆひたる姿賤し氣にはあれどさすがに捨がたしや、うかれをの見たらむには野末にたてる姫百合とも愛ましなど、思ひておのづから心も解け行にめの童の氷ほしげなるを、むげにさらんもつれなしとおもてふせなるをしのひているにわれより先にいこへる人もあれはもとめてそくらきかたのせうきによりぬ、めのわらはゝいとめづらしげにかゝる處にいつまでもと思へるさまなり、見るともなしにさきの人々を見れば若男二人をとめ二人そがひとりは十あまり五ッ六ッにやあらん、あたらみどりの髪を外國ふりにつかねたれど顔かたちけしうはあらず。今ひとりは一ッ二ッまさりて見ゆ廣き額も艶なき髪も、大和撫子とは見えぬまでなるかふたり同じ色なる染衣に花やかなる帯をさながら大國主の神が袋脊負ひたる如高やかに結びあけたり、そのこは廿あまり二ッ三ッにやあらん同じほどなるか飛白の洗ひ衣短かう着なしたるは口も輕げなり。白きひとへ衣着たるはつとめておもやかによそほひて紙卷の烟草く

ゆらしつゝ學校の敎師のよしあしなどあげつらひす、例の口がるは高く笑ひて君さる事はやみ給へゆかしき君らの聞わひ給ふらむをと、をみなの方を見やればふたりのをみなはなしろむけしきもなく、さなり妾らも日毎書見またあみ物などして頭いたきに、明日は休まむと思へばかねてのちかひわすれ給はずばいかで歌舞伎に以て行たまへとつゝましげもなくいふ、みどり子の母に乳を乞ふに似たり男はかしらかきつゝそはいとやすき事にしあれどこたひも又はかれる事のたがひめ出來て今に國の便りもあらねば暫時まちねといふ、ふたりのをとめは白き物におほひあへぬまで福よかなるほうをあからめて、いゝ事よとつぶやきぬかたへ聞せし我はいたくあきれはてぬ、されどをのこは耳新らしき事にもあらねど女の子もたる親のひたふるに吾が子めつるあまり都の手ぶり學ばせんとてゆかりもあらぬ宿にうつして、あはれ今の世の淸　索ともたゝへられよとをよひ折つゝ古鄕にまつらん親のこのさまを見ばいかに驚きなんいかにかなしみなむ、をみな子おほしたてん人は此處にみ心つけたまへとよその事としもおもほえずうちなげかれて、さきに慕ひ出ぬるもわすれはてたる笛の音のいつしか近づきて耳をおどろかすにと見れば、こも若き男にて顏も見にくからぬが髪はをどろ〳〵しうのびて肩過んばかりなるぞ暑さの宿りならむ、身には垢つきたる破衣に兵兒帶とかいへる白き布のやゝ黒う染りたるを腰のあたりにまどひぬるが、淸うすみ渡りたる笛の音を命とたのみて人の門に立つつ物乞にぞありける、嗚呼こも誰が子ぞ錦着て古鄕にかへらむとせし心を何にうばはれてか、あさましの姿よあはれとも人は見すやは吹すさふ音につれてあまたつどひ來しかば風のかよひ路もたえていと〳〵くるしければ童をすかしてかへりがてに

　うきふしを心にこめて吹つゝも　あはれ涼しき笛竹の音や

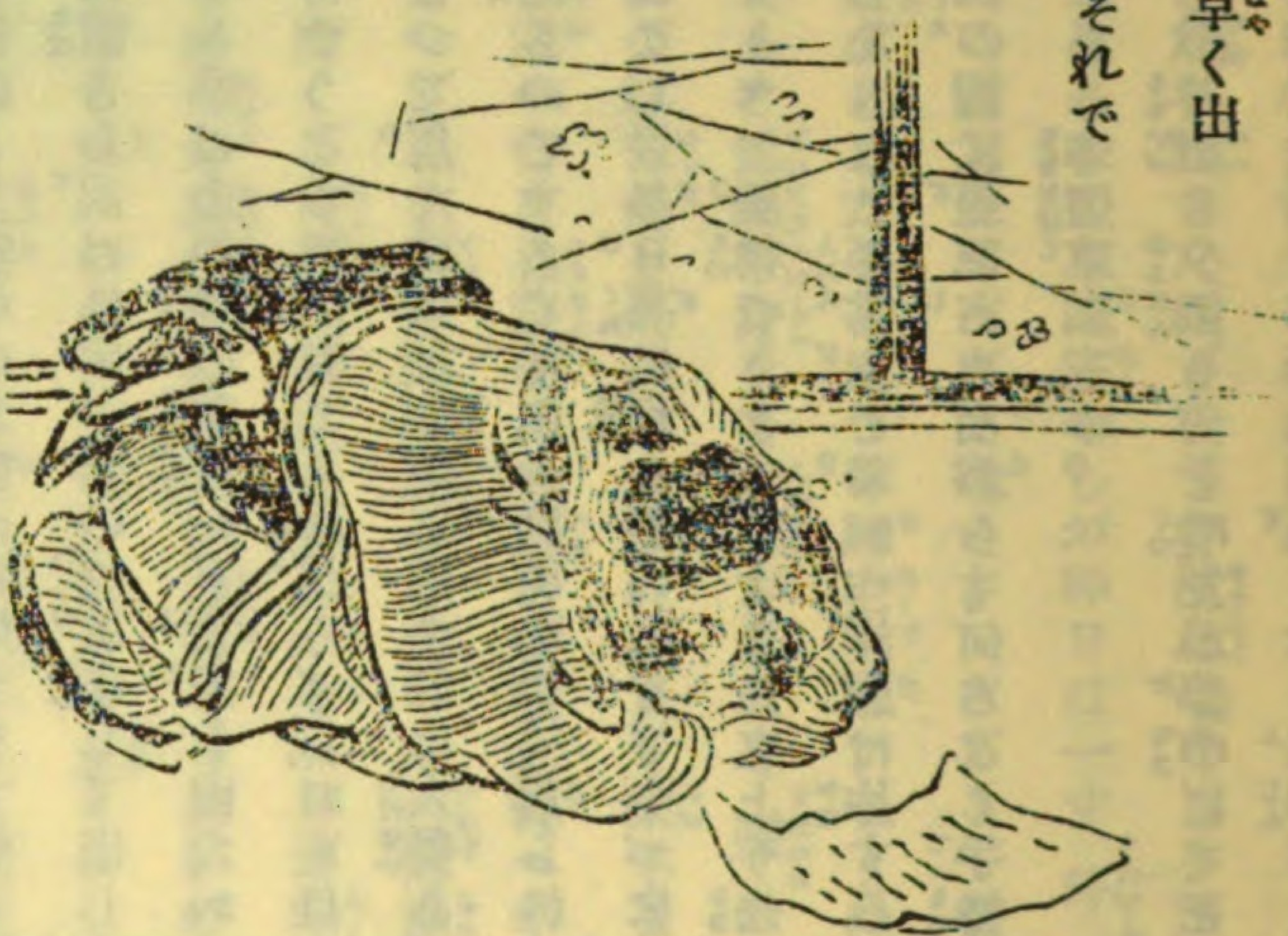
五月雨（上）

賤の舍女史

大通よりはやゝ引込みて車の往來こそはげしからぬ小家がちにて人通り多く騒々しき横町に是はと思はるゝ二階造りの一構新らしと云ふ程ならねど立派なる門の扉左右に開き、廻らしたる黒板塀の澁色鮮やかなるが門の柱に打つけたる木札には畑武夫と書かれたり然れど家内は寥然として高く笑ふ聲もきこへず甚だ靜かなりもし不幸にても有しとやと見れど然る氣色もなしハテ怪しやと思ふ内午後二時頃此閑靜を破りて勢よく門内へ引込む人力車やがて玄關へ引つけて「お歸りー」內より急ぎ出向ふるは妻君にや年は廿歲か最一ッ出たか位と覺しく然まで美しと云ふに有らねど何所と無く打あがりたるが眦尾少し上りざまにて口つきの引しまりたるは確に癇强き人なるべし最一人は中働きと覺しき女なり二人がいそ／＼として欣び向ふるに引かへて主人は何事か不平でもあるにや口を閉たるまゝ一語をも發せずヅカ／＼奥へ立入り居間の障子荒々しく引明け机の前へ身躰を投るが如く坐りたるまゝ身動きもせず良人の動靜の只ならぬに氣を吞まれたる細君は初の嬉さは何所へやら眉をひそめながらも着かへを持出で恐る／＼良人の傍により「お長い間の御旅行で無お勞れ遊ばしましたらう風呂も程無く沸きます故召物だけまづお替遊ばしませ」云へど猶答もせねば訝かしげに進みより「お歸り遊ばしてからお口もおきゝなさらずそしてお顏色も大分お惡きはお氣分でもおわるきか」重ねての問にも答へず唯權柄に「誰か水を早く持て來い」細君が自ら持來し水を硯にうつし黑すり流して何やらんさら／＼と書き後をふり向きざま細君の前へ投つけて「幸是を持てすぐ實家へ歸つてくれ」何事

と詐りながら差よりて開き見る一通取る手もふるうて見ゆるも道理こは別ならぬ離縁狀なり餘りの意外に口もきかれず涙も出でず只あきるゝ計なる橫顏しり目に見やりて冷然と「ナニ今更驚く事は有るまい仔細は其方の心に聞ひて見よ」心にきけと云はれ漸〻我に返りたる幸子云はんとすれど合憎に落る涙を手巾にて拭ひつゝ襦袢の袖をかみしめて無言のまゝ少時良人の顏恨めしげに見あげしが漸くに口を開らき「心にきけとは何と云ふ仰りかた離縁狀とらさるゝやうなる事せし覺はさら〳〵無きに」「今更何と云ふとも此方には證據がある此家では此新聞を取らぬから是程世間でうはさする事を知るまゐが此雜報を見て近所の取沙汰を見よ」と云ひつゝかくしより引出す一枚の新聞紙曇りなき身は何事ぞとあやしみながら取上げ見ればこは如何に姓名こそ匿したれ其となく所と番地もにほはせて某家の妻女は良人が諸縣へ出張中書生の某とけしからぬうはさと正しく我上を記せしと覺ゆるにぞ如何なる人のかゝる事云出けんと一向あきるゝのみなるを疾視つけ「其樣に新聞などに書たてられては己の名前に係る事僅か二月か三月の留守中に家を治める事が出來ぬやうでは後〻の望も無し又良人の顏へ泥をぬりつけた家にはお前は勿論居る積では無いのだろうから望通りに小田とくされ合ともどうとも勝手次第此方の云ひ分が了解たらお前の方には云ひ分あるまい荷物は後でかへすにしろお前だけはたつた今歸つてもらいたい」泣伏ゐたる幸子は漸〻に顏を上げ「誰がまア此やうな事を云出したのでせう塵程も覺の無いに私の曇り無い事は杉にお聞遊ばしても分りませう小田も程無く歸りませうから彼を糾して御覽遊ばせたとへ何と仰つても私は少しも覺の無い事」と云はせもあへずカラ〳〵と打笑ひ「不義の相手に聞たからとて知らぬと云ふは當前杉とても一ツ穴の狐だらふ家中の者一人も正眞な奴は

居ぬよく〳〵人の目にあまればこそ新聞などに書立られるのだ今更云ひわけなどは聞ずもよしお前のやうな恥しらずが居ては此家の穢一時も早く出て行てくれ」「それでも證據と仰るは此新聞ばかり確とした證據が外に」「エ、やかましい未だぐづ〳〵して居るのか何故早く行かぬ」とけんもほろゝな



る言葉には取つく島も泣く計然れど幸子は如何に心を決せしにや顔を上げ「身にさら〳〵覺は無けれど私が居ては家の穢と仰るに居りますも何とやら妙ゆへ其ではすぐ立去りませうが如何あつても此離縁状はいたゞきません隨分お身躰を大切に遊ばして御立身なされませ此汚名を雪がぬ内は此土地へ足ぶみせぬ心ゆへ萬一中途にて何所ぞの山なり野なり海なりにてはか無くなつた事をもし風の音にでもお聞遊ばし名前だけでもお覺あそばしてアノ幸かとのお言葉を下さらば草葉の蔭にてどれ程欣びませう」後は云ひ得で又一かへりふる村雨に濡れのみまさる袂を顔に押あてゝ蹌踉きながら立上り力無き足もとふみしめて出行く幸子常よりもつり上りたる眼には殘の露かゞやけども顔には犯しがたき色見へぬ。

己が言葉を立とほして幸子を出しは出せしものゝ心の靜まるにつれ考ふれば成程證據と云ふは新聞計外には何も確とした證なし杉を呼びて留守中の樣子きかん

か否々杉とてもたかゞ奉公人の事金でもやらば口留するは易かるべし何の〳〵家中の者には信用できず然りとてよそ人には猶さら問はれず一時の怒に任して出しては仕舞たもの丶幸はあの通の氣性一旦實家を出たからはたとへ如何やうなる事が有ても再びもどらぬと口くせのやうに言つて居たに母はちがふ弟や妹は大勢あれば實家へは歸らぬとすると外に世話になつて居られるやうな親類はなし最早日暮に程も無いにとさすがに心に懸る容子なりマア着物でもきかへようと立上り先程構へて持來しまゝなる平常衣と着かへ洋服は片すみへ押やり又候机の前に坐を占めながらも何となく手持無沙汰にて傍にある卷煙草二三本。

湯にもは入り杉が持出る夕飯も何を喰たか夢中にてそこ〳〵に仕舞ぬ杉は先程より幸子の居らぬを不審がほ幾度か問はんとしては口ごもる樣子然無きだに心に懸る事なれば胸はたゞむや〳〵意地は強いが心配性で少しの言葉違ひをさへ何時迄も氣にかけ居る程の女ゆへどう思ひつめてつまらぬ事をせぬとも限られず着のみきのまゝで出て行たがハテ如何したらふととつおいつ。

臥床しつらはんと平日の如く入來し杉猶幸子の見へぬをいとゞ不審がほ思ひかねてや手をつかへ「旦那樣」「何ぢや」と云ふも氣の無き聲「アノ奥樣が先程からお見へになりませんが何所へかお出ましに成りましたか」返事せん言葉なければ無言なるに「私は少しも存じまんでお送り申上まんでした」「今夜は歸るまいよ」と云ふ内も氣がゝりなり「左樣でござりますか」といぶかしげに出行くを呼とめて「小田は歸つて來たか」「イヱまだ歸りませんが何か御用で」「イヤ用は無い」追立やりても晴れぬ胸の中いつも長く外出した事の無い小田が今迄歸らぬとはハテ如何いふものかと思案にふけ行く夜半ふしどに入りてもねらるればこそ平常なれば

三月もの旅につかれて正躰も無く寝入るわけなるにまどろみもせで明したり顔色あしく心地もぼうとして頭痛さへはげしけれど報告あれば出勤したり然れども氣にかゝるまゝ急ぎ歸つたれど幸子の消息はなし小田は武夫が出勤せしあとにて歸宅せしが昨日は一寸外出せしに途中にて國元の朋友に出逢いすゝめらるゝまゝに不相應の遊びをしたるよりつい歸宅出來ずなりぬ以後は必ず愼まんと低頭平身して謝罪するにぞ疑の雲のうすらぐにつれ行衛を氣づかふ事いよ／＼深くなりぬ何にしろ實家へ行き相談せんと急ぎ晝飯を終へ幸子の實家新井方へと車を飛しぬ玄關まで行くや否出逢がしらに内より出くる父親「ヤ武夫さんか今からお宅へ行かうとする所大分顔色がわるいが身躰でも悪いのか行違ひにならんで宜かつたサア何にしろお上り少しきき度事があるから」問度き事と聞き無言のまゝ坐敷まで從ひ行きぬ挨拶もそこ／＼に主人が先づ口を開き

「實はね今朝九時頃此手紙が届た讀で見ると事情は書かずたゞ思はぬぬれ衣着せられたが心外ゆへ畑へは歸らぬ覺悟出た以上はあしき事にて足ぶみせぬと決心した實家へは猶歸らぬ此汚名雪がぬ内は決して都の地はふまぬ御兩親樣に御目にかゝらぬが殘念と書てあるので意外の事だから驚いた何か事情が有る事だろうから聞に行ふと出かける矢先へ松井の姉さんが來て一雄が一昨日北海道へ行くと云ふ手紙を殘して出て仕舞たと云ふのだ何か親子口論でもしたかと聞て見るとナニどうもしないが去年の春頃からまるで別人のやうになり折々はうつとりとしておかしい事が有たから注意して氣にさからはぬやうにして居たが十日程前よりは別けて落附かず何かそや／＼して居たから充分見はつては居たが一寸湯に行た留守に此始末と云ふのだ一雄をたよりにしてゐる人だから仕方が無い居所の知れる迄此家へ同居する事とし荷物をまとめて來るやうにともす

こし前に歸へし今から己が出かけやうとする所なのだ何寄お前の方の事情がくわしく聞度い」問はれて今更のやうに行つまりぬせん方無ければやう〱に口を開き「誠に面目も無い事に成りました皆私の短氣から起つた事」實はかく〱と昨日の新聞の事を話し一時の怒によく許しもせずかゝる事仕出したる己が短氣を謝るに父親は眉をひそめ「ナニ幸は死ぬやうな無分別は仕舞が何としても困つた事折悪く母親は今朝早く病院へ兄の見舞に行てまだ歸らずハテどうしたものか」と思案にくれたり。

男の事とて涙もこぼさずには居れど最愛の女が行衛知れず立去りしときゝ如何許か悲しく心細く情もたゞさず追立てし我身をつれなし憎しと思ひ給ふらんと思へば氣の毒さといとしさに胸は沸かへるやうなるを漸く靜めて「父樣此やうなる事に成りましたも皆私の短慮からゆへ此まゝ行衛が知れませんでは何とも貴方に申わけが御座いません届くだけ手をまわして必ず探ねます故私よりの音信をお待ち下さるやうに願ます隨分秘密に致す積ゆへ其おつもりで成るべくは親族方へも知らさぬやう願度いものですが」「ナニ其は己の方でも成るべく名の出ぬやうにしたいから何分秘密にする事と仕よう」「然う仰つて下すつたので實に安心しました今朝からお目にかゝつたら何と申たら宜かと其計心配して來たのです母樣のお留守中に長坐をしました必ず必ず近い内に吉左右を申上ます母樣がお歸りになりましたら何卒宜敷願ます」「マァも少し居てもいゝだらう母親もぢき歸つて來るだろうから出張中の話でも聞うよ」「有難う御座いますがまだ報告類もありますから今日は是でおいとま致します」「然かそれではとめても何だか又相替らず遊びに來てくれ」「ハイ有がたう御座います」と挨拶も何と無くいつもよりは行儀たゞしく覺へぬ。

幸子は如何にしけん何地行けん時鳥の初音待つ頃もはか無く過三伏の暑さも吹く風身にしむ秋の夕べも夢の間に暮れ行けども絶へて行衛の知れざれば今はさすがに持あぐみてはや亡き人の數にや入りけんと泣く／＼思ひたへて立出し日を忌日として畑、新井兩家の佛壇に新らしき位牌の並ぶ事と成りぬ。

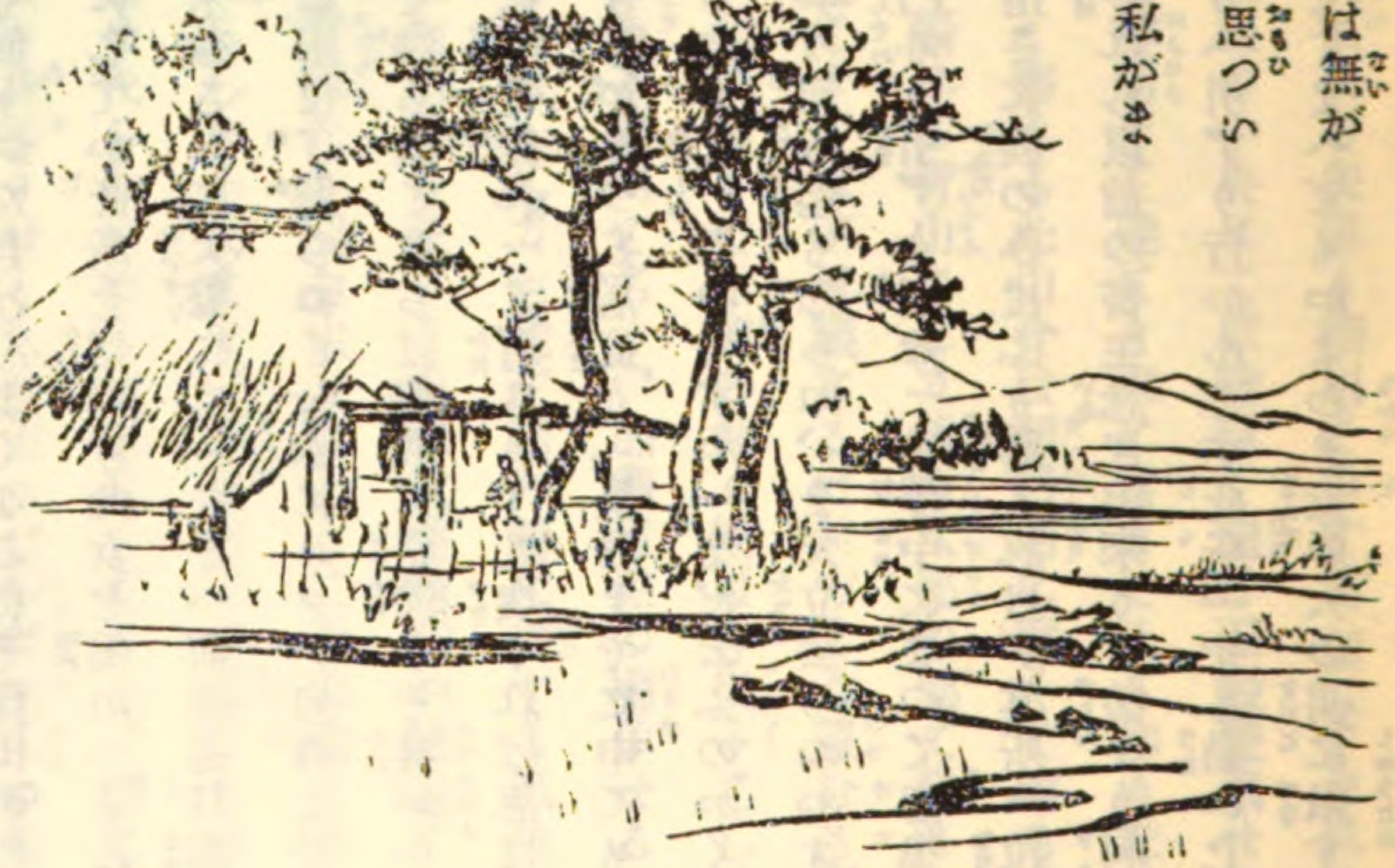
都ははや花の梢も青葉に移らふ四月の末雪消のする越路にて名たゝる新潟より遠からぬ某郡のある村はづれ田圃道の片方に年へし松の枝葉いやが上に生茂りたる木蔭に少やかなる茶店あり消のこれる雪は猶ふかく何所霞たる所とては無けれど行く春のかへり見にやうやう咲き出たる梅の今盛なるもめづらしく鶯の聲なつかしく鳴きゐたるは見るかげも無き賤が垣根ものぞかるゝぞかし然るを花見ん爲のそゞろあるきには有らで旅行く人とも見ゆる年若き一人の婦人此茶店に足をやすめぬ、奥の方におりし老婆はいそ／＼と出來り澁茶一杯くみて差出しながら切に世辭をふりまけり婦人は何か心にかゝる事でもあるにやしきりに打案して老婆の言葉も半分は耳に入らぬに似たりやがて重々しげに口を開き「お婆さん此村では今日何が有るのだへ」「へイ今日は郡長樣の御巡行があるそをで先達から掃除など急いで居りましたが未だお出に成りません此所は是非お通りに成るのですから穢く無いやうにと是でも隨分骨を折つたのです」と云ふ折しも車輪の音きこへ初むれば老婆は急ぎ立出て恰も昔殿樣の御通行でも拜するが如く地上に蹲踞して是を待てり婦人もやがて立出んとする途端に行過る車三四臺婦人は何か非常に驚きしもの丶如く思はず「オヤ」と聲を立てあと追かけんと二歩三あし走り出しが又立止り少時思案のやうすにて又もとの腰掛へ歸り入れば老婆ははや內に在りて爐の火をおこし居れり「お婆アさん」と呼ばれ「へイ何で御座います」「今通つた人たちのどれが郡長さんだへ」「二

番目に入らしつた眼鏡を掛けた色の淺黑いお髯のたくさんはへた方で御座いますよ」「然うかへそしてお名前は何と仰るの」「藤田樣と申されます」「藤田と小聲でくりかへし何かしきりに考へ居る婦人には氣もつかず「アノ郡長樣のやうによく分つて慈悲深い好かたは有ませんよ私共を初め郡中の者一人として惡く云ふは無くたれでも皆神か佛のやうに敬つて居ますが少しも橫柄な事は無くどのやうな者へでも言葉をかけて下さつてほんとうに、どの位よい方でせう」と猶何やら云はんとする言葉を婦人は遮つて「してあの人は何年程前に此郡へ來たの」「然うで御座いますねヱ今年で足かけ五年になりますよ丁度今頃でしたイヤも少しおそかつたか何でも朝の內はそれ程で無く正午頃から急に恐ろしい嵐になつた日でしたが乘て來られた船が港近くなつてから岩に當つたとかで沈沒したので遠方から引移つてお出ゆへお荷物も澤山有つたのに何一ッたすからず只小さい革包一ッ持つて救はれたのですよ其に猶お氣の毒さまなのは奧樣とお二歲におなりの孃樣とお二人とも船の破壞れた時今の郡長樣と御一所に海へ飛込まれたそうですが日は暮て仕舞たし風も浪もまだ強くて遂に離れて仕舞つたとの事で其明日すぐ小船で探ねられたが死骸は少し離れた磯によつてたのですぐとお葬式が出ましたが誠にお氣の毒ですよ今でも書生一人と飯焚男との二人きりで女きれが居無いから臺所などは隨分きたない家ですよ」「此所から郡役所までよ程あるかへ」「ナニ澤山遠くは有ません三里と少しも有ますか其位な者です其すぐ前が郡長樣のお邸です家は廣いけたが郡長樣は家に居られても至極やさしい方だそうですよ」「然うかねへ郡役所へ行には左へか右へかどちらへ行くの」「右の方で御座います」「然う」と立上り手荷物引よせ帶の間よりいくらかの茶代を盆の上に置き

「大きにお邪間しました此所へお茶代を置くよ」『ヘイ有がたう御座いますお静にお出なさいまし』。
入相告る遠山寺のかねの音に花も散そふ夕ま暮何か物おもひにしづめる一人の婦人郡役所の向なる板塀にてかこひたる一構の門前を行きつもどりつ入らんとしては入りかぬるが如くたゆたいて胸に手をあて動氣を靜むる如くなりしがやがて思定めし如く眞一文字に玄關さして進み入り一聲微かに音ないぬ然れど答ふる人聲も無ければ訝かるが如く首をかたむけしが此度はやゝ大聲にて音なへば太くむくつけき聲にて答ふると共に立出るは肥滿なる書生なり「旦那樣は御在宅で御座いますか」問には答へで不審そうに頭の先から爪のさき迄見廻せし未「どちらからお出になりました」「ぢき此村はづれに居ります者で」『何か御用ですか』『ハイ』『少しお待ちなさい』言捨て奥へ入りしが暫時にして出來り「是非逢ねばならぬ御用ですか」「ハイ是非ともお目に掛つてお願ひ申たいので御座います」『お姓名は』『お目にかゝれば分ります』『何にしろマアお上なさい』案内につれて坐敷に通りぬ少時して間のふすま明けて入來る當家の主人藤田の顏見るより突然聲をかけ「一雄さん誠にお久ぶりでお目にかゝります一雄と云はれ何故か非常に驚くものゝ如く鋭き眼を光らせしが何氣なき躰にて「拙者は藤田久政ですが貴女はどなたですか」貴方の行衛を探ねる爲に五年の間の艱難辛苦で此通り瘠衰へて昔の面かげは有ませぬからお見忘れなさいましたらふ」と云ふ顏つく〲と見てびつくり「ヤヽ幸子さんか」『ハイ幸です』『何の用で其樣は拙者を探ねるのです』『何の用だか貴方の胸に聞て見れは分りませう貴方は何故松井一雄と云ふ姓名をかくして藤田久政などゝ云つて居るのです』『其樣な事はどうでも宜しいマア何の用だか其を聞ませう』『ハイ用事とは他でも無く身のぬれ衣をほして戴き度のです』『ぬれ衣などゝ其や

うな事は一向知らぬが」「知らぬ事はありますまい無躰な戀がかなはぬを根に葉に持つて夫の留守中に書生と不義せしなどゝ覺も無き事を新聞に投書して女の身に此上無き恥かゝせ自身もさすがに後めたくてか北海道へ行とて姿をかくし此やうな所で姓名まで更へて郡長樣とか人なみ／＼に晝中道を行かれた義理ですか貴方のお蔭樣で北海道のはて迄もさまよひ行て辛苦をしつくしましたサア身のあかりのたつやうにして下さい」とつめよれば此方はグッと落附はらい冷笑ひながら「心から立られたうき名を人にけせとは何面さげて言るゝ言葉ぞ火無き所に烟はたゝずよく／＼人の目にあまればこそ新聞などにも書れるを自分の不品行は棚へあげあかりをたてよが聞てあきれる何所をおしたら其な意が出るだろう」「出るか出ないか此紙に覺がありませう」と云ひつゝ懷中より取出す一枚の反古目前に突つけ「是は貴方の手跡にちがひありますまい」「相違無ければ如何したと云ふのだ」「此文字の書主を貴方と知るのです」「知つてどうする」「どうもしません只此やうな事を書て恥かゝされたを雪で戴きたいのです」「其樣な事をした覺へは無い」「無ければ何故親族へいとまごいもせず貴方より外に頼の無い伯母さんにさへ置手紙などをして此樣な所へ來て松井一雄と云ふ名までかくして居るのです何故此やうな後ぐらい事をするのです」「置手紙をして來ようと名前をかくそうと此方の勝手其方から其やうな事を云はれるわけは無い」「云れるわけは無くとも汚名を雪ぐ義務は有ませう」「無い決してない」「無い事は有ません此紙に自筆で書てある通り投書して私の顔へどろを塗るやうな事をしました」「其樣な紙が何の證據になる者か」「成ますとも／＼新聞に出たとて畑に出された時はたゞ口惜さと悲さとで夢中で何事も考へずたゞ涙を明し暮しましたが心を落つけてよく／＼考へて見ると何うも投書のやうに思はれる

が其にしても此やうな事で恥かゝさるゝやうに人の恨
を受ける覺へは無が
只一ッあると思つい
たは貴方の事私がおよ
だ實家に居
た時分かに
かくと仰
つた事もあ
りました畑へ
縁附てから
も實家で御
一所になつ
た時良人あ
る身と知り
ながら無躰
な事仰つたを今は主ある身と手づよく申たを大層お



立腹の樣で「おぼへて居よ」と仰つたまゝ父母へ挨拶
もせずお歸りになつた事もあるのを思出しもしやと新
聞社で聞けば投書との事原稿さへまだ有るとの事見れ
ば確に覺ある手跡其まゝもらい受け證據の爲にと肌身
はなさず五年と云ふ長の年月貴方の行衛を探ね〴〵て
先月の末此郡の村はづれの茶店で休で居ると其前を車
で行過た兩三人の中に貴方に其儘な人を見た時の嬉さ
前後もしらずあとを追かけやうとしましたがもしや他
人のそら似かと念の爲め茶店の老婆に聞けば姓名は藤
田此郡へ來たのはあしかけ五年前途中で嵐にあい妻子
は溺死したとの事其では違ふとは思つたものゝどうも
思ひきれず此村へ來て毎日〳〵注意してやうすを見も
し聞もすると如何しても貴方のやうゆへもし間違ふた
ら其迄と度胸をすへお目にかゝればやはり貴方是と云
ふも皆私の罪の無いを神の憫んで引合せ下さつたと云
ふものから迄申たらお了解になりましたらうサァ此汚

名を雪で下さい」とぢり／＼詰めよるさま思込だる一念に女ながらも侮りがたきけんまくなるにぞ藤田事松井一雄は如何にしてか此所を切ぬけ此女を追かへさんと少時思案の末殊さらに大聲にて「たとへ何時迄口説おるとも知らぬ事は了解らぬと云ふにタツテ何時までもしやべり居て歸らぬとならば巡査に引渡すぞ其がいやなら今の間に早く歸れ」と肩さき丁と突やれば思はず後へよろめきしがきつと居直り「是程までに申てもまだ覺無い知らぬと仰るのですか」「まだ云ふのかくどい奴知らぬ事は何所迄も知らぬ、まだ立去らぬかオイ金井此女を門外へ引ずり出せ」と夢中になつて怒鳴れば幸子は口惜さに涙のみはふり落て思はず其所へ泣伏すを金井と呼れし以前の書生急ぎ出來りて後より利腕攫み玄關の方へ引ずり行かんとす此所一寸も動かじと必死となりてすまへどもかよわき女の大の男に敵すべくもあらぬを松井もとも／＼力を添へ玄關の障子蹴放し式臺へ投出し起しもやらず其まゝ地を引ずりて門外へ突出し見かへりもせず内に歩み入り障子はたとしめ切たり。

地上に泣伏し正躰も無く見へし幸子やう／＼氣づくまゝに人や見てあやしむらんと蹌踉きながら立上り雲間の月をたよりにてすご／＼歸り行く心の内や如何ならん。

談叢

◉紙腔琴　銀坐三丁目十字屋にて販賣する紙腔琴は西洋樂譜は勿論日本の歌曲にも奏し得られ且つ簡易に習得せらるれば遊戯の具に好適すべし

恩に報ひたる鶴の譚

はなぶさ

己が鄕里は肥後の國宇土と呼べる處此は千石計りの田

舍にては可なりの町なり、以前は釆地三萬石にして今の細川侯の別家なる矢張り細川と申す君領せられけり、位置は肥後の中央にて原野遠く墾け五穀豊熟せる沃土の眞中を排開きて建てり東に當りて人も知りたる雁回山瘤の如く蟠まる此山今は頽然老に就くと雖も、一時は最とも蓊れる青山にして鎮西八郎の建て籠もり雁を弋たる處とす、又不思議なるは何方より望むも同じ形にて視ゆ北に當りて白帆の如く横はり混々として盡きさる長江あり緑川と名く、加藤清正の堀作せるものとす下流は水廣ふして白蛇夕陽の間に沒する風流島有り、西に陽白山あり此より山脈重疊稍稱や峻嶮となり宇土半島の脊臆たり陽白山は町より二十町餘り上り五町許りの愛らしき小山なり、姿は富士の孫とも申すべく擂鉢を覆せたらんが如く足引長く延けり、頂に五六本の古松あり身振り好く立ち並らび髣髴美人の島田にも似たり、巨石松の間に横る遊目臺の三字を刻む、

此より眺めば一望十里指呼の間に在り宇土町は眼下に在りて丹の形を爲す我等幼時休暇には三五の友と蕨を採り兎を逐ふたるは此の山なり又磐石ありて砥の如し畫して碁の目を爲る俗に天狗の碁磐と呼べり、但し藩主遊興の時臣下と黒白を挑みしものとなん山と町との間に二個の丘陵あり南なるは小西の城墟にして城山と呼び北なるは長和



恩に報ひたる（一）

（此は如何にや）の城跡して西岡と云ふ宇土よりの路西岡に至りて一曲す此處を舞出と名く舞出より三丁許にして同岡の南邊に當りて神社あり西岡神社とす近郷一圓の守護神の鎮座なり此の神社の前を通じて西に走るの道は山麓翠隈の通路と知るべし舞出には道ゑるべあり六角地像あり又老爺の反物を背負たる石像立てり此の石藏こそ衆人の疑問にして眞に話の種なれ。

陽白山の半腹に神山村あり數十名の離落たる寒村なり、彼の力士不知火の生れたるは隣山の粟崎と呼べる村なり、神山は今ぞ寂寞たるなれ元は宇土町の本都とも申すべく、昔しは一躰の數村なりしが開化此處にも見舞ひて地墾けるに從ひ耕作は二里より三里と隔り鋤鍬昇ての掛仕事には餘り遠かりしかば出稼なるもの起り初は馬小屋めきたるもの一二軒なりしも水澀はよし行通は便なり諸事山よりも暮しよく思ひ合せたる如く來り住み一年にして群を成し貳年にして邑を成し遂に三四百名、先は町の形は備りたり此れぞ宇土町の始めとかや。

閑話休題今は昔し神山村に爺と媼と住めりき百姓家の位として今日の暮しには左して困まらざりしも千の藏よりも寶なる子とては養ひ猫の子より外は居ざりしかば二人は是のみ明暮憂ひたり農事の暇には宇土なる寺に詣ふで善知識の法話を聽聞するをこよなき樂としたり霜月の或る朝空摸樣悪しく媼の止むるを聞かず御正忌中の事なればとて何時もの如く出て行けり法話の終りし頃は雪さへチラ／＼降り初めたりしが町端より西岡を目懸け只管路を急ぎけりと見れば廿間許り彼方に鶴の罠に落ちて翼合ゑめに〆付られ踠けども跳れども逃るゝ術はなかりけり爺は視るより憐愍の情に堪へぬものから鶴の傍へと馳行きしに何時しか狩人馳來り早や鶴を捕へて締殺さんず一刹那、老爺は周章押とゞめ『やよ狩人其鶴を得させせんや』と言へば狩人頭を左右

にふり『否とよ花主より賴にて此の三四日辛くも得たる品なれば』『さわれ我は法正忌參りのもの日外陰陽師



恩に報ひたる(二)

の申さるゝに其方は前生にて心鬼々しき狩人にて夥多の鳥獸を殺したる報にて今生にて子なしと其より日夜心を碎き一件の功德を積まばやと思へども未だ罪の滅ばざるにや其機だになくて居たりしに今此の塲を見て何條も見捨難ければ執り逃したりと思ふて曲て得させよがし代りに此の反物を進ずべければ』と早や目に餘る涕に狩人も有繫に色動き『斯く迄乞はるゝを菅なく抗むも空恐ろしゝ』と漸く諾へば爺は喜び負たる反物を與へ嬉しげに鶴を放し遣れり鶴は危き命を拾ひ羽ばたきして二三十間走りて舞上り見顧り〱飛去れり爺は影の失するを見初めて安堵の思いを爲し是も佛樣への土產とて足輕に歸り行く

麥秀離々として南風に浪打つ春の最中雲雀はテンックジーックと囀ずりつゝ虛空に穴を穿つ許り三五の百姓は今年の春作も先づ豐穰なりとて德利と刀魚の藁に包みたるを後先にして山擔にて舁きながら笑談し行くあり折柄一りの爺は寄る歳波に足元の助とて杖突きながら斯くと見て獨言つゝ彼等は隣村の作兵衛と其子供今日の休業に春作の祝ひの買物に出ての歸路ならん子寶も二人ありて皆倜强𠑊や樂からん吾にも一人有あらば

とて打悄れたる足元は倚怪しく聽聞の歸りと見ゆ早や舞出の此方に來懸りしに何處より來りけん十餘りの小娘地上に服して泣き居たり爺は走寄りて抱き起し何處のものなるや連にはぐれや去つらん路にても失たるらんと樣々に勞はり問へは娘は漸く涙を拭ひ我は父母に先たれ兄弟も無しと又愁然と泣きければ夫は氣の毒なることぞよ我に子なければ好くは來玉へ飢い目は視せまじと最と懇ろに云ひければ娘は喜び只合掌む許りなり爺は子なき折りに天の與へと打喜び娘の手を引き吾家差して歸り行く爺と婆は願ふても無き事とて只管娘を可愛がり其身が云ふがまゝ鶴よ鶴よと呼びけり元より器用の生れなれば教はる事聞く事覺り速く十三四の頃は手習より縫針さては機織る藝迄誰に習ふとなけれども成人も及ばぬ計りに熟しけり二人は此上なきことよとて愈愛で慈しむ娘も夜は縫仕事晝は機織りに餘念なく働きしかば二人は安樂に暮すを得て十六のいざよふ頃には家事一切を娘に手渡し二人は念佛三昧にぞ暮しける

氏より育とは云ながら白蓮は泥に染まず些の粧に搆なき阿鶴も天資の麗色は消ゑやらず固より家の爲め養父母の爲めをのみ思ふものから髮も眞の束ねたるまゝ衣裳は汚の付かぬと云ふ許りなるも村中の若者はなかなか只には措かず喃れ我が者にして見まほし所詮かなはねばせめて顏にても見ばやと犇めくぞ道理なりされば爺媼も人の譽るが嬉しく天晴好き婿取りて初孫の顏見ばやと一日鶴を膝近くよび『阿女の孝行にして玉るゆゑ兩人は此上もない安樂左はあれ朝まだきより宵更ての働き倘し煩ふてばし玉らば杖とも柱とも賴む我等は暗やみマー少しは息み玉へ』と云へば娘は『否とよ回顧へば最早七年西も東も便りなき身慈悲深き御兩人內に置て下さるさへ忝しと思ふて居るもの生みの子に優りたる御勞り身を粉にしても足らぬもの必らず案じて

下されな』何時もながらの親切過分なるぞと老母は目に餘る涙を拂ひ『時に阿女も最早年頃押付ながら孫右衛門が二男龜吉は緻量なら心立よし阿前とは好連合と大抵話も濟たれば』と云はれて娘ははつと紅らむ顔打つ仰き『不束な者には過ぎたる良人宜きに取做し下され』と聞くより老父母は今更の如く安堵して只管準備をぞ爲したりける

生者必滅會者定離とは善知識の訓なれど老爺は娘の可愛さに法の道さへ打忘れ或る麗らかなる日好むに任せて娘の嫁着調らへんと常日になく出嫌ひする阿鶴を引立杖音コツ／＼先に立てぞ急ぎける既や半分も來ぬると思しく西岡神社の前を通り舞出に差し掛れば娘は突と立止まり爺を呼止め打萎れてもじ／＼するを爺は氣遣かはしげに立寄り『やよ如何になしつるぞ腹にても痛むにや』『左にはあらねど今日は是非打明ねばならぬとの侯へば』『何にてもあれ阿女の申す事何條否むべき定めて嫁衣の好ならぬ其ならば始より此爺の思ふ所兎もあれ呉服屋に至り存分に望み賜へ』と云ふに鶴は堪へ兼ねて涕聲『左る恩愛を懸け玉へばこそ今日明日と云出し兼ね今迄は過じたれ』と聞て爺は呑込み夫なれば大方婿の氣に入らざるもでがなあらん其にしても未だ祝言の濟まぬ前破談するも易き事左は氣遣はぬものぞと云はれて娘はせき上聲を惜まず泣倒る良時て顔を擧げ『ノウ我こそは先年阿爺に救られ辛き處に命を拾ふたる鶴なるぞ驚き玉ふは尤なれど其萬分の一恩報しにと假に人の形と化し此迄は侍りしが是非に今日は歸らにやならぬ事となる老て先きの短き御兩人に歎きを懸けるは恩を仇の返しなれど畜生の身何樣も靈聲の人には嫁かれず今は養子も濟たれば好き嫁も必ずあるはず必ず御媼にも傳へて玉へ御さらばと早や翼叩して舞い上る

老爺は呆然と打眺め鶴は見顧り／＼て一里許りの彼方

なる森にて影は失にけり此處を今に鶴見塚とぞ申傳ふ今は學術の進歩と共に斯かる虛誕無稽の話は三尺の童子も信ずべくもあらねど我等幼時老婆の副寐の話に斯かる事もやと思ひたるが未だ記憶に斯なれば若樣孃樣の御伽にもやと書きて付く

天才無き小兒の譚

校長ウワイズマン氏、左の書狀の依賴により暑中休暇の終に新生徒の入學を許したり。

拜啓遜見サミユエル事學校に遣し置き候處、先生方にも到底見込なき者と、見捨てられ候程の、愚鈍の性質に候へば、小生親として尙更以て可憐に候、就ては有名なる貴師の熟練を以て、御迷惑乍ら宜しく御敎諭御世話あらん事、嘆願仕り候遜見は十一歲にも相成り候へ共、今以て生地の國語を、何時も僅に讀み得るのみに候、彼が七歲の折、近隣の文法學校に通はしめ候處、敎師は早速語學に於て、進歩無を認められ候、又習字を稽古致させ候處、彼は何も爲す所なく、只だ手本は机上に投げ置かるゝのみ、尙算術に於ても、地理に於ても、仝樣に、天才の不足、記憶の薄弱なる者と見え、何も出來不申候、今暫もして成長致し候はゞ、少々は才智も得候はんかと存候得共、只今の處にては、前述の次第、如何なるものにや、覺束なき次第に候、然者何卒貴師の經驗を以て、彼の性質に何が好適致し候か、遜見當人差出候間、御一見被下試驗の上、御敎諭被下度、萬事先生の御心に、御任せ申候間、暫時御留置き、何分よき樣、御世話被下度願上候、謹言。

ハムフレー、アクレス拜

ウワイズマン氏は、此の書狀を讀み終り、頭を振りながら、附添人を顧み。

ウ「よく丁寧に、アクレス君が、此の書狀を送られた、

アクレス君は、其小兒が天才無しと思つて居れど、流石愛子の事だから、充分に稽古さしたら、必ず小兒が何か天才を現はすだらうと思ふやうに見える、兎も角も、小兒に遇つて見やう、其兒も人に違ひないから

直ぐにサミユエル、アクレスは呼び入れられたり。

小兒は恰も、笞刑に處せらるべく行く如く、頭を垂れ、考へつゝ、靜に歩み來れり。

ウ「此處に來なさい、誰も構ふものはない、そこに居ないで、私の傍に御出で、君は幾歳になりますか。

サ「過る五月で滿十一年。

ウ「君は實に年の割に大きいね、君は多分遊戲を、好みましやうね。

サ「はい。

ウ「君は彈石が上手ですか。

サ「はい少しは出來ます。

ウ「それから君は、獨樂を回すでしよう、輪廻も上手でせうね。

サ「はい。

ウ「君は文字が書けますか。

サ「私は少許り學びましたが、最早止しました。

ウ「何故。

サ「先生、其が出來ませぬものを。

ウ「否ソリヤいけない、君は外の小兒が、何樣して其を學ぶと思ふか、外の小兒が、君より澤山に指を持ちて居るか。

サ「否え。

ウ「君は彈石が出來ても、筆を持つ事は出來ないのか知らん。

サミユエルは、只だ默せり。

ウ「君の手を、お見せなさい。

サミユエルは、跳らんとする熊の如く、兩足を延ばし

ぬ。

ウ「私は君の手が、外の學生と一所に、習字が出來ない樣な、障害のあるを見ない、そして君は書物を、讀めますか。

サ「はい。

ウ「さらば教室の戸に、何と書てあるか、讀で御聞せなさい。

サミユエルは、口訥つゝ、

『嘗て人が爲せし所の者は、亦た人の爲し得る所のものなり。』

ウ「そのやうに讀むやうになつたは何のお蔭です、みんな君が困苦を爲したによつて讀めるやうになつたのだらう。

サ「はい。

ウ「さうだらう澤山困難を嘗めると君も善く讀める樣になりますぞ、それから君は拉丁の文法を知て居るか。

サ「否知りませぬ。

ウ「君は少しも知らぬか。

サ「私は學ばんと思ひましたが、心に止むる事が出來ませんでした。

ウ「君は覺ゆる事が出來ぬと、何故言ふのです、君は一週間の日の名を、順次に言へますか。

サ「はい、言へます。

ウ「それから一年間の月の名を知て居ましようね。

サ「はい、知つて居ます。

ウ「君は又君の兄弟の名、お家の下男の名と、其他村内大抵の人名が言へますか。

サ「それは出來やうと思ひます。

ウ「それが一、二、三を記憶するより、困難いか。

サミユエルは只だ點し居るのみ。

ウ「君は算術を何迄學びましたか。

サ「加算までやりましたが、上達しませんでした。
ウ「何故。サ「僕には如何しても、出來ませぬものを。
ウ「一錢で幾個の彈石が、買へるね。サ「先生、新しいのが十二。ウ「それでは五厘では。サ「六個。ウ「それでは二錢では。サ「二十四買へます。
ウ「若し君が、一日一錢づゝ、貯めたら、一週間に幾錢になりますか。
サ「七錢になります。ウ「其內、二錢遣ッたら、手に幾錢殘るか。
サミユエルが暫く考へて、五錢、と言ひき。
ウ「宜しい、もうこゝで加減乘除の四則算が出來た、算術はこれより外にない、宜しいよしサミユエル、私はこれから、君に適當するものを考へやう、併し君は專一にそれを勉强しなければならない、誰も決して出來ナイといふ事は、一つもない、もういひから、朋友の處へ行ッたがよからう。

サミユエルは試問の濟みしを喜で立去りき、此の試問にて彼は非常に感激して、己の心に自信を置きたり。」
其の翌日より、熱心を以て己の課業を始めたりき、終には年少の小兒に筆寫を依賴せられ、又は文法の講義を聞かるゝ樣になりけり。
サミユエルは二三の英文を讀み得、また充分に理解せらるゝに至りぬ、此少年は斯樣に堅く着々として課業を勉めたるにより、メキ〳〵と學業進歩し文章を作り、又乘算の大半をも了解するに至りぬ。
此の時ウワイズマン氏も最早彼の父の許へ依賴狀の返信を出すべき時來れりと思ひ、喜んで次の書狀を送りけり。
先頃は以御書面御申付の次第委細承知仕り候御愛子の事に就て無ぞかし返書を御待に相成り候事と推察仕り候へ共小生は速斷を厭ふものゆゑ靜かに時機を待ち居り候處今日は是非共返信差上ざるを得ざる好

時機と相成候、先頃の御書面にては何が適するか更に相分らず、依て小生に撰み呉れる樣との御委賴に候が其後御樣子一變なされ才智無きといふ次第に無之若し御愛子の天才を以て只今の通り斯樣に確固たる御決心を以て、志望したる事業に御勉强相成り候はゞ少しの勤勞も敎訓も要せずして人に立勝るべく存られ候小生も數多の子弟を取扱ひ候處愛子の如きは生涯三四人の少數にして稀に見る所の者と斷言仕候人類として爲さゞる可らざるのものは、職業に候へば或技藝を御愛子になさしめらるゝ事望ましく存じ候へ其技藝に於て不足なく完全したる人物たるは小生誓言致置候若し貴下商業或は他の職業にて御愛子を立身せしめんと存候はゞ何れにても成業するに疑ひなくと存候生活上最も大切なる者最も貴重なるものは多くの艱難を經、大なる辛苦を甞めて後獲らるゝものなりとは常に小生の好んで口にする所の訓言に御座候、適したる職業を撰ばんとて無益に時日を御消耗成されまじく獨樂及彈石の外又愛子の好まるゝ事業も可有之存候御愛子も小生と一所にある如く、無益に光陰を費さず單に御勉强なされむ事注意致候乍失禮愚見を用ゐられ愛子が好まるゝ業に專心力を盡され候はゞ其業を以て身を立て名を擧げん事疑ひあるべからず候匆々不備

ソーロン、ウ井セマン拜

此に書狀の敎訓に彼の父は全く同意せざりしかどウヲイスマン氏以前の敎師よりは小兒に付ての種々の敎訓が大に適中したるを確知し父は數年間此學校に其兒を通學せしめたり、此少年學藝着々進歩し學校を卒業して或る業につき後に衆に勝れたる人物となりけり。



西洋旅館の話

黃　花

旅館の仕掛の大きくして仕組のよく整ひたるは、米國なるが、合衆國紐育市などにては東西南北より汽船汽車にて入り來る旅客、日々十萬人に及び、此内七萬五千人は中等下等の旅宿下宿屋に入り込み、二萬五千人は皆上等の旅館に入るといふ。其上等の旅館にても、二萬五千人の一時客の外、常顧主一萬人、旅館の婢僕一萬餘人、都合五萬人を養ふことなれば、其仕掛もまた中々の大事なり。今其仕掛を示す爲めに一例をとるべし。

紐育市に五番丁ホテルといふ旅館あり。創立以來永の年月を經て常に紐育第一の位を占むる一大旅館にて、夥しき大仕掛なるも常に整然として客の小言一つ聞かぬは、如何なる手際あるかと云ふに、地層の下に五十餘室に分れたる窟の如き一階ありて、凡そ料理、洗濯、物の修繕を初めとして萬般の働はおの〳〵其受持〳〵の場所に於て滯ふりなくせられ、此處と客人の間には宛ながら動脈神經脈ともいふ可き聯絡の仕掛ありて、呼べば答へ求むれば應じ、聊も澁滯なきことなり。

婢僕　各室の客につきたる室婢(倚小間使の如き者)といふもの一人つゝありて、一日に二回づゝは必ず室内を見つくろひ、一切の整理をなす。其上幾人かの副監督あり、一旅館を幾區にか分け、一週に二度おのおの其受持の區を點撿し總監督又一週に一度丁寧に見繕ふ。もし破損の個所あれば、直ちに命じて繕はしむるを以て、室内常に整然としてみだるゝ事なし。地層の下には指物師、塗物師、細工人、器械師、製管師、瓦斯係等ありて、凡そ館内の器具萬端の破損改造などは

皆此處に於てし、また敷物窓掛の繕ひなども此處にて行ふ。レースの窓掛の如き專門のつくろひ女あり。普通の家にては一年に二回も洗へばよきも、旅館の事とて一ヶ月に一度必らず洗濯するを以て、大抵一年には此女の手にて一萬張を繕ふといふ。大勢の室婢は皆席に客室の事にのみ注意するがゆゑに、我部屋の事は自然打捨ておかざる可らず。さればまた各室婢の下に婢ありていろ／＼の用務をなす。室婢とても飲食物も、相應のものを供せられ、月給は上等の室婢にて月に十二弗、客より心付また大抵十二弗に及び、朝六時より夕の六時迄出勤し、一週に四夜は大抵我部屋に入りて己の用をなすのみ。

洗濯　家相應に洗濯も非常にして(一)テーブルかけ敷布、布團の洗濯、(二)臺所用前掛類(三)客の着物、(四)僕婢の着物と四部に分ちて洗濯す。始終客の用ゆる蒲團敷布の數五百とすれば、常に其四倍二千の用意あり。食事用のナプキン日日千として、五千枚、手拭二千として、一萬條の用意あり。ナプキン食卓かけの類は一度用ゆれば必ず洗濯するきまりなれば、其いそがしさ尋常想像の及ぶ處にあらず。手拭などは上等の客にても持ち去る事多ければ紛失も夥しといふ。

掃除　朝三時頃より拭ひ方十五人、はたき、はくもの十人、甲斐／＼して立働き、掃ひ洗ひ拭ひ磨き、六時頃は悉皆終り、客間、廣間、食堂、階段まで奇麗に照りかゞやき客の起き出る頃は何處を見ても鏡の樣に光り渡る。凡て洗濯所よりは前日の中に洗濯すみし敷布枕其他を渡しあれば、室婢は部屋掃除の時に悉皆取替へ、亦客の出發するあとも直にとりかへ一夜用ゐし夜具も必らず洗濯せざる事なし。洗濯頭の婦人は、中央リンチル室にありて一切の洗濯出入ものを取り集めまた室婦もおの／＼小簞笥を持ちて、其受取し洗濯物を仕舞ひ置く。諸室婢洗濯物をリンチン室にもちゆけ

ば、洗濯頭より直ちに其數だけの洗濯濟のものを渡すやう供へありて、一躰に規律のよく整ひたる、さながら軍隊組織の如く、一部全躰秩序誠に整然たり。

食事　五百人の客三度の食事は更なり四度にても五度にても望次第といふことなれば、庖厨の混雜は素より買出も中々なり。青物魚類の市場は夜中頃に開くれば旅舘持主の中一人必ず自ら赴きて買出をなす。食物類の監督には番頭ありて、野菜肉類これ〳〵の品入用と一々買物帳に記して持主に渡せば、持主は夜半より出かけ、朝七時半頃歸り來れば、朝飯には如何なる鮮魚も望次第なり。但し肉の用は特に夥しきものなれば氷にて冷やし貯え置く肉類ありて、大抵二週間分位は常に貯えあり。舘内仕事の順序をいへば、夜の十二時頃よりパン燒始まり、五時には番頭帳場に出勤し、六時、料理番、七時に給仕來り、八時には總ての機關立派に整ふ。故に下まはりにては夜は十二時頃まで急がしく、午前十一時より午後一時迄、午後三時より五時、八時半より十時迄の休息時間あるのみ。此休息の時間が即ち掃除の時間にて、皿類庖厨器具も日に三四回は必ず洗はるゝなり。パン燒などをのぞき、料理人のみにて男十五人、女十人を要す、中野菜の料理方は綿密を要すれば、大概女の手にかけらるゝことにて、毎日ポテトーを用ゆる事四樽、一年には丁度四十エークル（我十六丁歩）の地に出來る程のじやが芋をつかふと云ふ。肉をやくにも、六本脇骨つきの中塊と大塊を一時にやく事とて、此料理部屋の熱さは非常、いそがしさも非常なり。クリスマスなどの祝祭日には七面鳥を二百羽も用ゆる事なるが、皆一度に鐵棒につり下げ、車仕掛にてくる〳〵まわしやき、したゝる脂は下なる大皿に落つるやうになれり。鳥牛の外にフライなどいろいろ料理すれど、料理場各別々になりて一ならび一度にするさま、なか〳〵盛なるもの。六時半ディンナーの

頃は、料理場のいそがしさはまた一層にて、其混雜の間に間違なく配當する樣、中々目覺ましき事なりと云ふ。料理場には料理頭ありて、凡ての指揮をなし、料理番は料理頭に、料理頭は番當に、番當は持主にと次第に報告す。また給仕もこれに同じく、給仕は給仕頭に、給仕頭は番當に、番當は主人に支配せらる、給仕は空腹の時ほど客の機嫌の損しやすき事なきに、十人十色の注文を少しも間違はぬやう庖厨に傳ふるは容易の事にあらず。併し辛抱すれば頗る儲多き務にて此旅館には二十五年もつゞける給仕ありといふ。米國人は一躰にコーヒー好きなれば、此旅館にても日々何斗を要す。これを作るには、コーヒー出として、コーヒーの粉に熱湯を注ぐのみにて、煎ずるなどのめんどうなく、至て輕便の器を用ゆ。

破損　臺所、食堂、流し等にて硝子、瀨戸物の破るゝ事は莫大なるものにて、大抵四分の三は破るゝ故、年年フランスに一萬兩だけの瀨戸物を注文するといふ。されど此頃回轉洗滌器とて車仕掛にて熱湯ふき出で、いろ／＼の器具を洗ふやうになれるものを用ゆるに至り、大に破壞を減ぜしとぞ。

五百人の客、大勢の奸僕、よく賄ひて、物のすたらず不足せぬ樣にするは、中々の熟練を要するなるべし。

家政

洗濯

K　K

綿布麻布の類はシャボン湯にて可成手早に洗ふべし。色物は一層早きをよしとす。但し色物を洗ふときに、生明礬燒明礬を粉にして石鹼湯に混ずれば、色さむることなし。

絹布は、白色石鹼、蜂蜜、燒酎（燒酎二十ならば蜂蜜

三、石鹼三の割合)を混じ、軟かなるブラッシユに浸して絹布の表裏より摩擦し、後清水に一時間ばかり放置し、然る後温湯にて靜かに洗ふべし。乾すときは、竿の代りに糸を用ひ、又は細き紐を二本渡して掛くるもよし。たゞ、絹布の重なりつかぬ樣に注意すべし。生乾の時に、微温火の火熨をかくれば艶を生ず。

時節がら白地の着物を用ふる事多ければ、往々洗濯に困ることあり。洗ひ方には別に方法なけれど、糊をつくる際、少しばかりの藍粉を混ぜ、とかし用ゆれば、眞白となるべし。

花と衛生

梅、桃、丁子、薔薇、橘類、忍冬、葡萄(實も)等は强壯劑及豫防劑の効あり。百合、西洋スミレ、類などは頭痛を催し、神經をいらだゝせ、又麝香は、人の體質にもよれど、槪して有害のものなり。凡て以上の花にて製したる香料、麝香を入れたる香袋及凡て廉價なる香水(いろ〳〵の混りもの多ければ)等は衛生上よろしからず。此頃の如く次第に暑くなるにつけては入用も多ければ、是等の事も心得をくをよしとす。

いろ〳〵

硝子器物の不潔を除くには、少量の鹽酸を水にまぜ洗ふべし。

油類の衣服又は端物にかゝり斑點を生ぜし時、これを拔くには、先づ油のつきし部分を一重にし、其斑點部の下に清潔なる綿を布き、上に馬鈴薯葛粉を置き、暫時放置し、のち之を掃ひ去り、又た前の如く馬鈴薯葛粉を置く、幾度か右の如くして斑點の除き去らるゝ迄續くべし。

古びたる麥藁帽子を洗ふには、少許の硫黄粉をとりて橙酢にてとき、少きブラッシュにてぬりつけ、暫時たちて水に浸たせし布切にて拭ひ去るべし。

赤葡萄酒が白地の衣服等にかゝりて、斑點を生じたるときは上等のアルコールを以て洗ふべし。

但し此法は、正眞の葡萄酒に限りて、効ありと知るべし。

金塗の額ぶち、鏡のふち等の光澤を失ひし時、又は蠅の糞等つきたるものは、玉葱を二つに切り、切り目の方を以て靜かに金塗の處をなで、のち海綿を水に浸し叮寧に拭ふべし。

ゆで玉子を其儘饗應等に用ゆるとき、其殼に不潔物のつきたるは、甚だみにくきのみならず、不快を感ぜしむるものなり。これを去るには布切に酢を浸して、拭ふべし。見事にとるゝものなり。

不潔なる壜の内部を洗ふには、馬鈴薯を些さき霰に切りて、凡そ一握餘り壜のうちに入れ、水五勺計を注入し、堅くコロップにて口をとざし、暫時其儘に放置し、後ち數十回振り、終によく〱水にて洗ふべし。

家畜小話

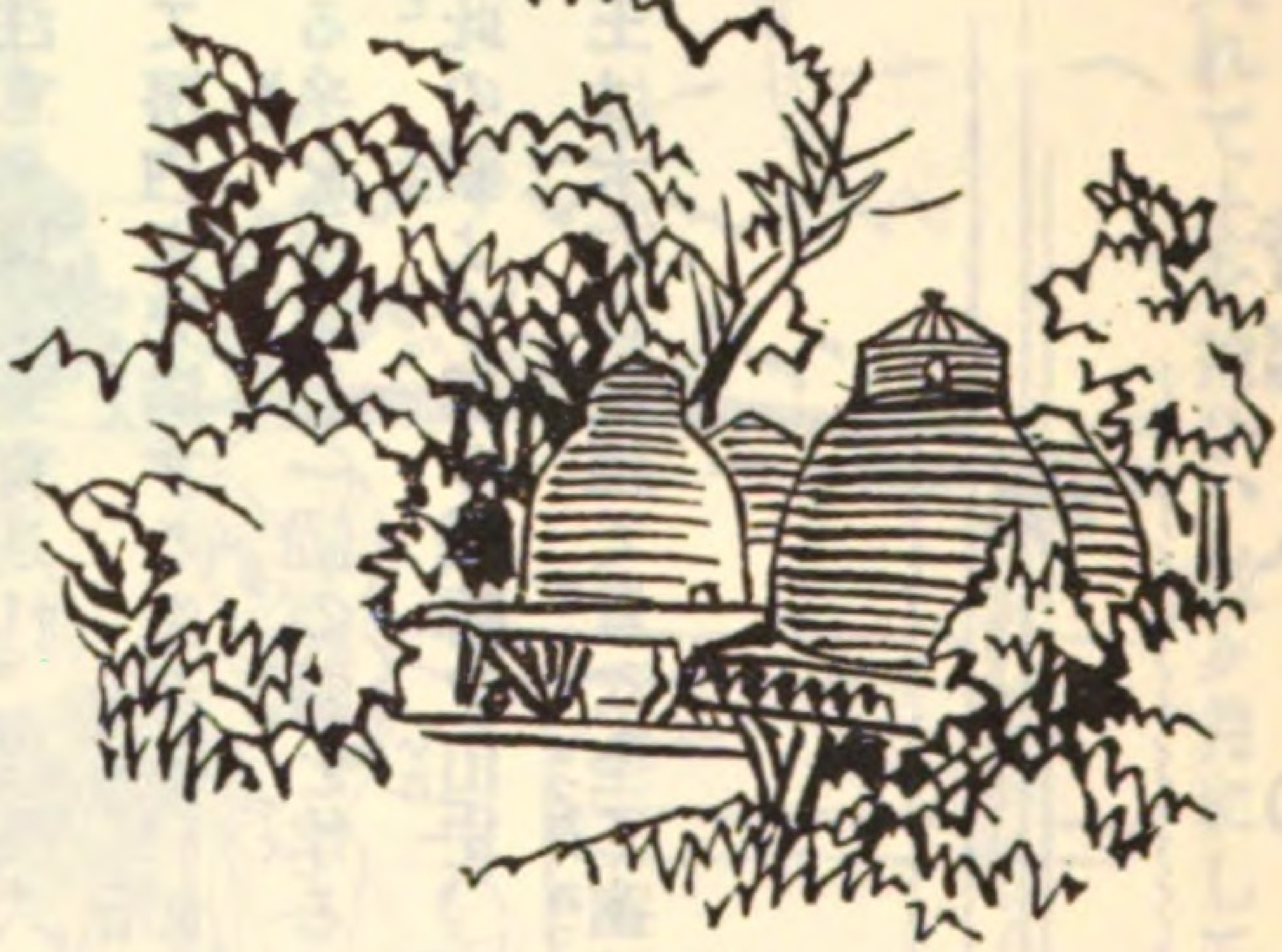
今號より引續きて家畜の話を掲くべし、家畜は家庭の愛玩娛樂のみならず、能く之を飼養する時は動物の自然歷史（ナチュナル、ヒストリー）を知るの智識を增し、飼養完全の境に至らば、之を以て職業さなすに足るなり。

蜜蜂及其飼育法

蜜蜂が有益の羽蟲なる事を記するに當り、先づ蜜蜂を蜂房の内に飼育する方法を簡略に述べん、而して次に蜜蜂の群は如何なるものにて成立たれるか、群には如何なる區別があるかを説明し幷せて之を飼育する實益の談話に及ばん。

蜜蜂の群が住む可き巢を蜂房といふ、實に蜜蜂は此の巢の内に生活し、又此の巢の内に蜜を貯蓄するなり。」

讀者よ蜜蜂には蜂王、遊蜂、職蜂の三種の區別あり、蜂王とは蜂の母にして即ち雌蜂の事、遊蜂とは雄蜂の事をいふ然れども此の二者は勞動することをなし。職蜂とは蜜蜂のうち最も小なるものにて常に勞動に從



事するものをいふ、蜂王の產卵は溫暖の季に多く、其の働作は常に靜やかなれども自ら王たる尊嚴を有す、此の蜂の他の職蜂と異なる點は躰の大にして長き、羽の短小なる、針の屈折したるにあり、遊蜂は蜂王の如く其躰長からざれども大にして又職蜂よりいはるかに長き躰を有するものにて此の蜂は頗る懶怠なるものなり、されば時々職蜂のため追ひ出され翌年の春まで姿を見せぬ事あり。



職蜂



雄蜂



王蜂

職蜂は最も短小なりといへども其數の許多なる實に驚くべきものにて常に一致して共同の事業に從事す即ち

一房內に穴を造る事。

一房及蜂王を守護する事。

一蜜を取集め之を製造して巧に蜂蠟となす事。

一蜂を養育する事。

一遊蜂を追出事。

等とす。

蜂の數は房と事情と氣候の變化により其數に增減ありといへ雖、一房に大率蜂王一、遊蜂二千、職蜂二萬の多數に上る、蜂王は一年間大抵職蜂の卵を生み、春季には別に雄蜂の卵を生む、之と同時に職蜂は直ちに王

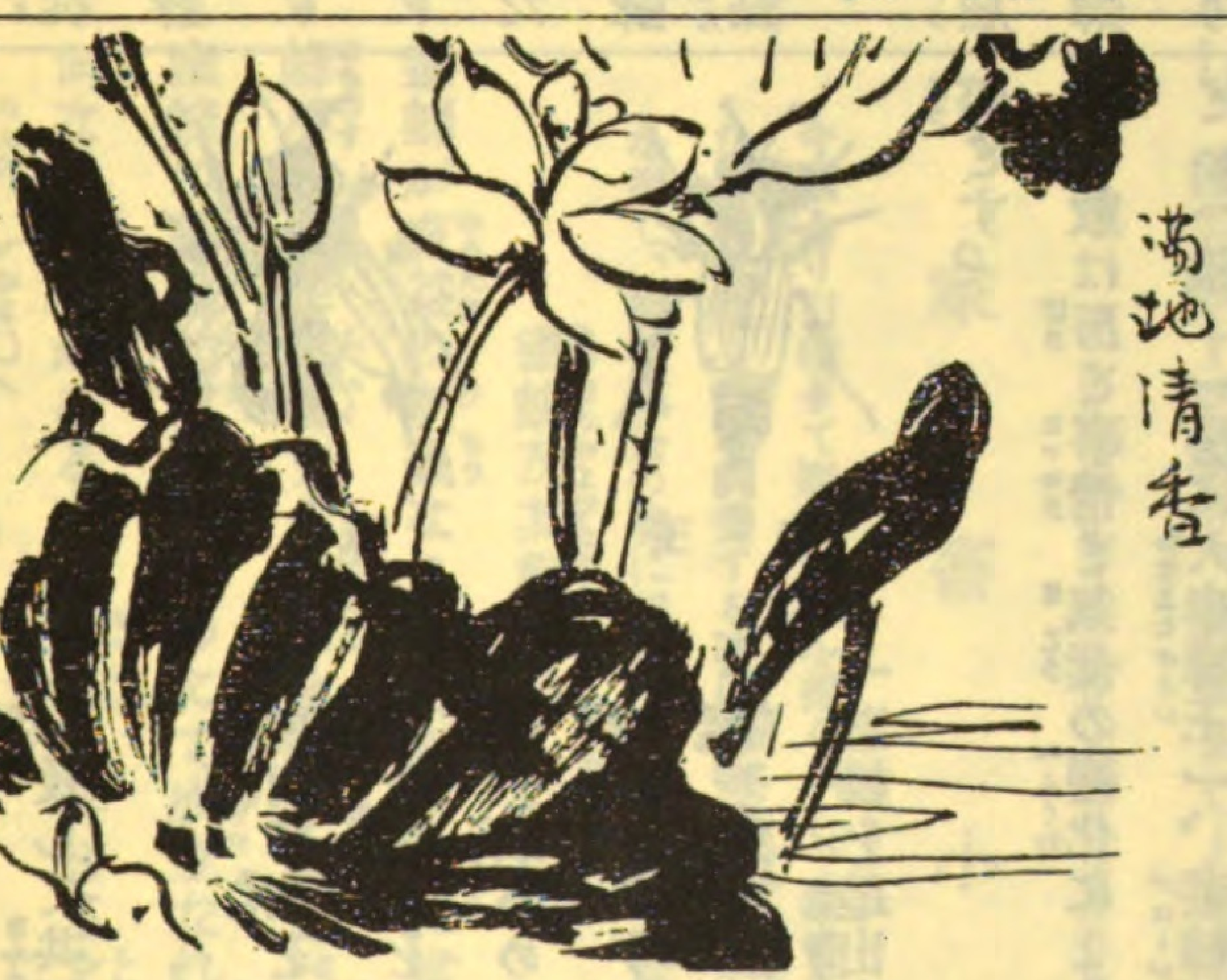
の室の建築に着手す。
職蜂の卵は僅少の日數にて孵化され白色の蛆となり、蛆は直ちに喰ふために口を開く、此の蛆は蜂王の大なる注意を以て養育され、以後六日間にて多くの蛆生長して房内に充滿するに至る、此等の蛆が絹の如く柔軟なる糸を引出し一個の繭を作る、而して二十一日を經て此の繭より四の職蜂を出す、其他雄蜂は二十五日、蜂王は十六日を經て皆な全く蜜蜂となるなり。

（つゞく）

雜錄

婦人の世界

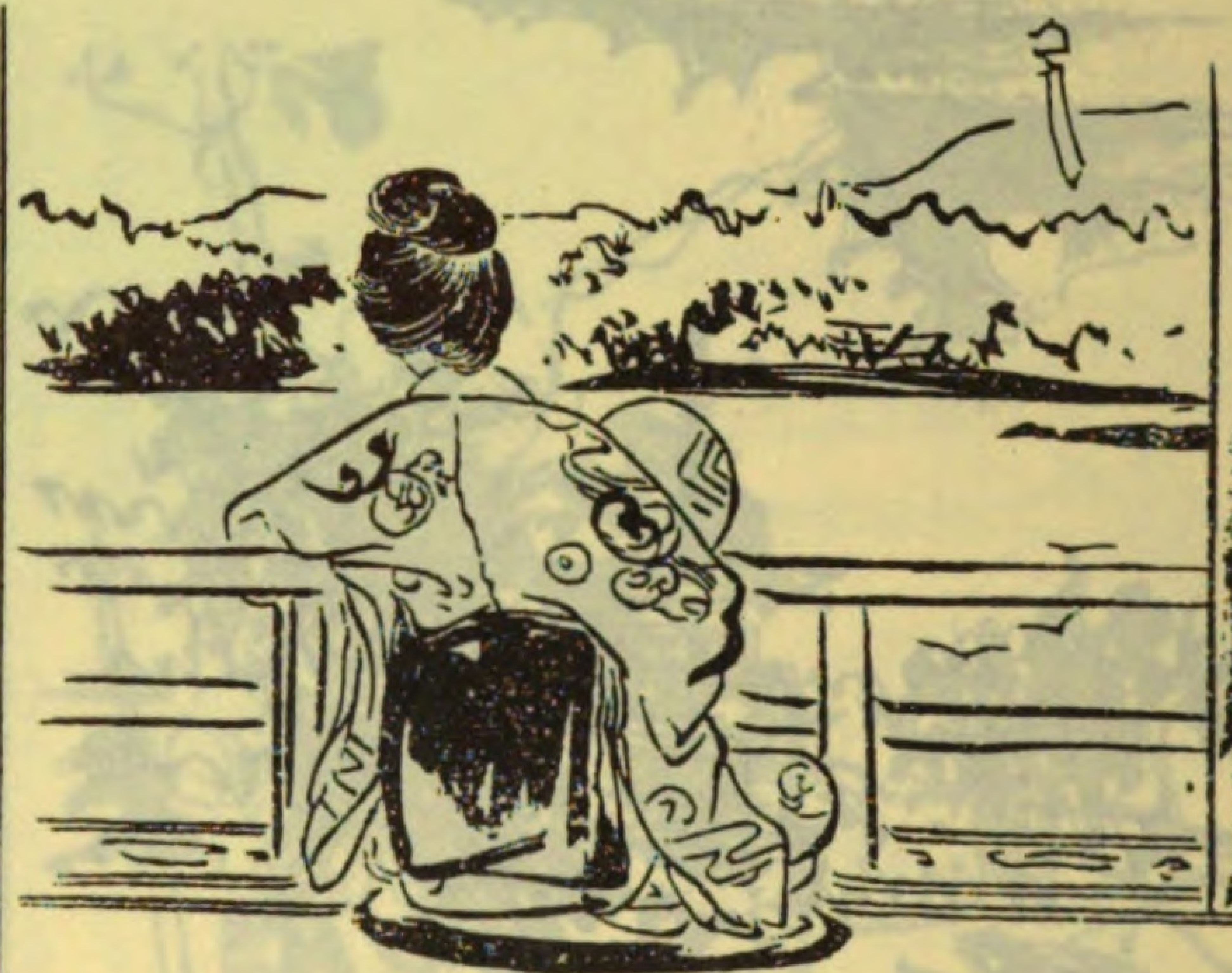
◎探險家の妻　先頃北極探險成功の評判ありし那威の人ナンセン博士の細君は矢張那威の人にて活潑なる婦人なるが、結婚の前夫妻相約して結婚後もおの〳〵其業に從事す可しと云ひし約束を守り夫は北極探險の途に上り、新婚の細君は音樂を敎へ、人寄りの場所に歌ひなどして、非常に稼せぐと云ふ。歐洲諸國の中にて、那威の婦人は、尤も質朴にしてよく働く由なり。



◎印度女の兒啼止法　印度にては、赤兒子供の泣く時は、母は子供の口を手にて打おほひ、また鼻をつまみて息する能はざらしめ、子供の啼く毎に斯くすれば、子供も終に息のつまるは

啼く故にて啼けば息のつまるものと心得、自づから啼かぬ様になると云ふ。

◎茶の漬物　緬甸國にては、茶の新芽を摘みて湯煮、深さ六尺の穴を掘り、芭蕉の葉を敷き、其の上に茶を入れて土を掩ひ、數ヶ月にして之を取り出し、蒜または乾魚と共に油に浸して食ひ、または之を茶にたてることもあり。



◎幸福なる女皇　英國女皇當年七十七歳、位に在る六十年、子供六人、孫三十六人、曾孫十三人。

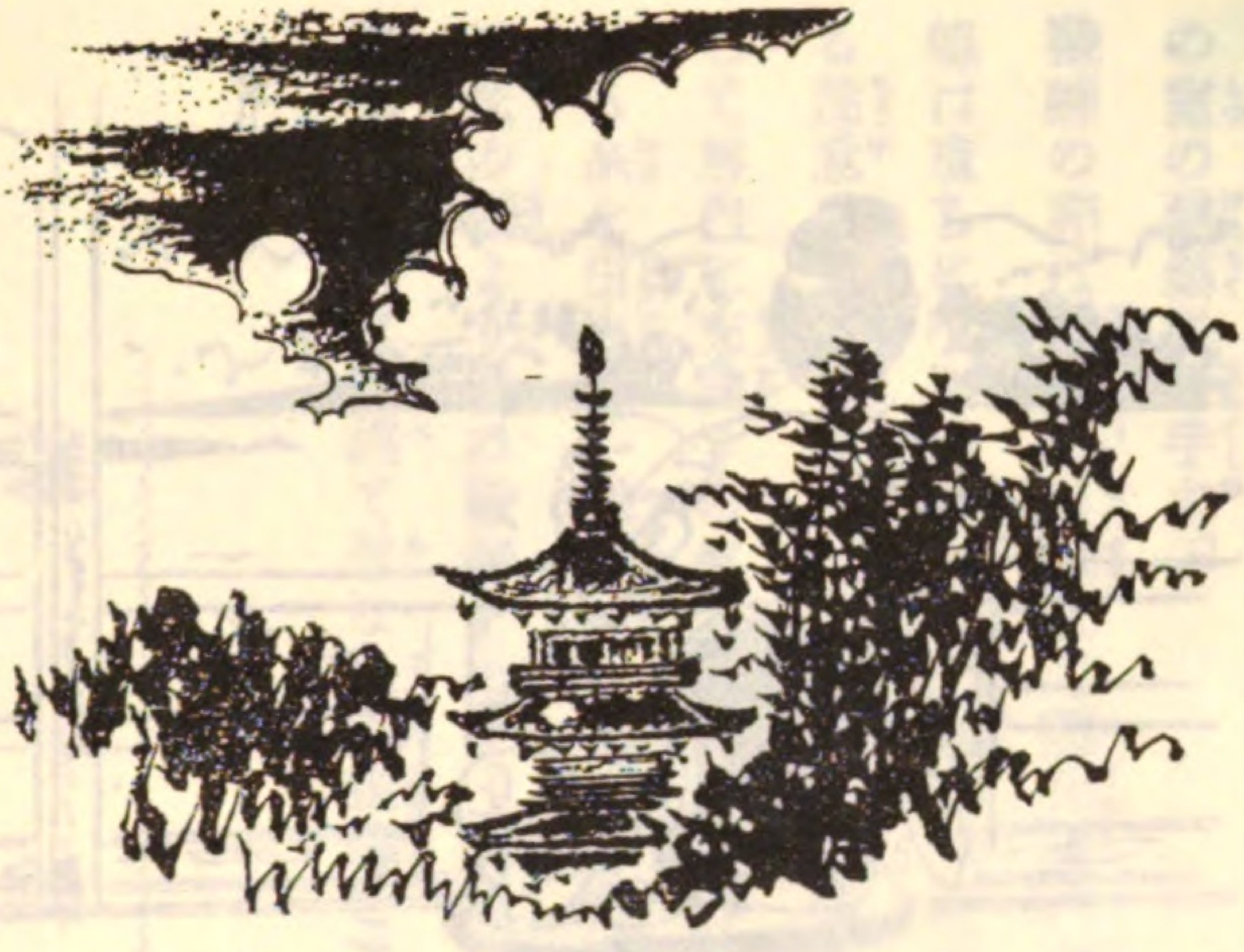
◎暹羅王の家族　暹羅王は正妃二名、妃嬪八十八名、實に女七十二名、兄弟姉妹五十名、伯叔父母二百二十六名。皆王と共に眠食するを以て王の臺所には料理方二百人あり。

綠陰雜話

俳諧堂主人

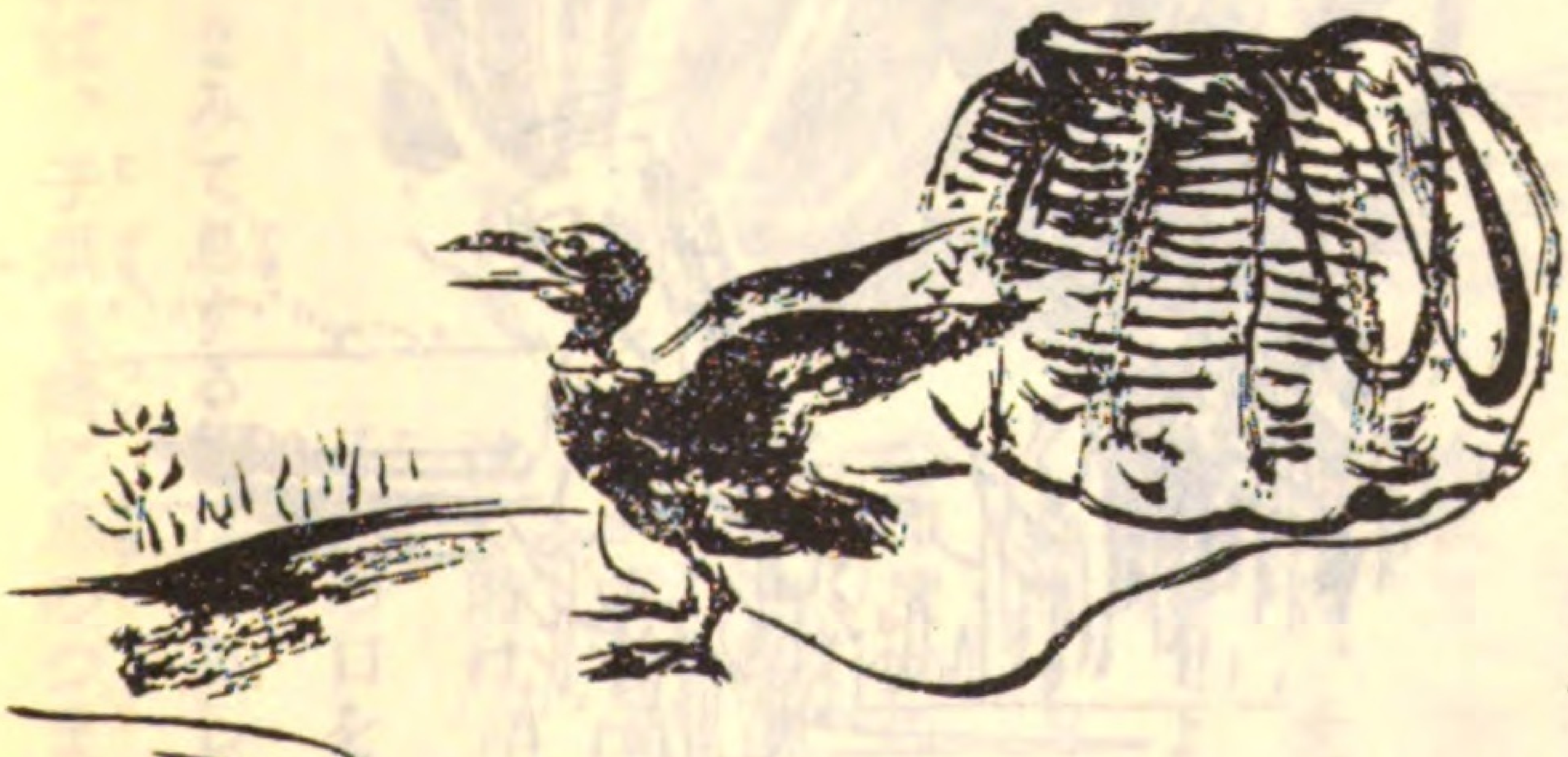


◎近頃ある友人より借得てビクトリヤ女皇の日記を讀



む其中に親愛世に類なきプリンスアルバート一朝此世に去りてより又滿天下誰一人我をビクトリヤよと呼ぶ者なし、此優しき詞を聞得ざるに至りて、我は初めて淋しきといふ事の實を知れりとの一句ありたり、領土の廣き東西の世界にまたがる大英國の君主、九五の高き位におはし、英名赫々として海の內外に轟き渡る、賢明なる宰相ありて上に政務を輔佐し奉り、忠良なる臣民ありて下に萬歲を祈り奉る、何の不足かこれあるべき、水晶殿裡に侍女近臣各こ美を盡して左右にはんべるの日何の淋しき事があるべき、されども是はこれ唯に其の外面の觀察のみ、其內部に至りては陛下御手づからの此數行、其消息を漏し盡せり、外國の民なる我々すらよんで爰にいたり知らず〳〵淚を催ふす。

◎三國時代といへば支那の歷史中尤とも面白き時代になり、其頃の有樣をつと面白く書きなせる一部の軍書演義三國志とて四大寄書の中に數



られ有名なる金聖歎の評あり、或は聖歎外書とか又は第一才子書など〻様々に難有味をつけてもてはやさる《日本にも譯され通俗三國志とてひろく行はる》余も亦嗜好常に座右をはなさず、徹頭徹尾面白からざる處なし、されどもつとも余が心を得たるは劉備赤兎馬に

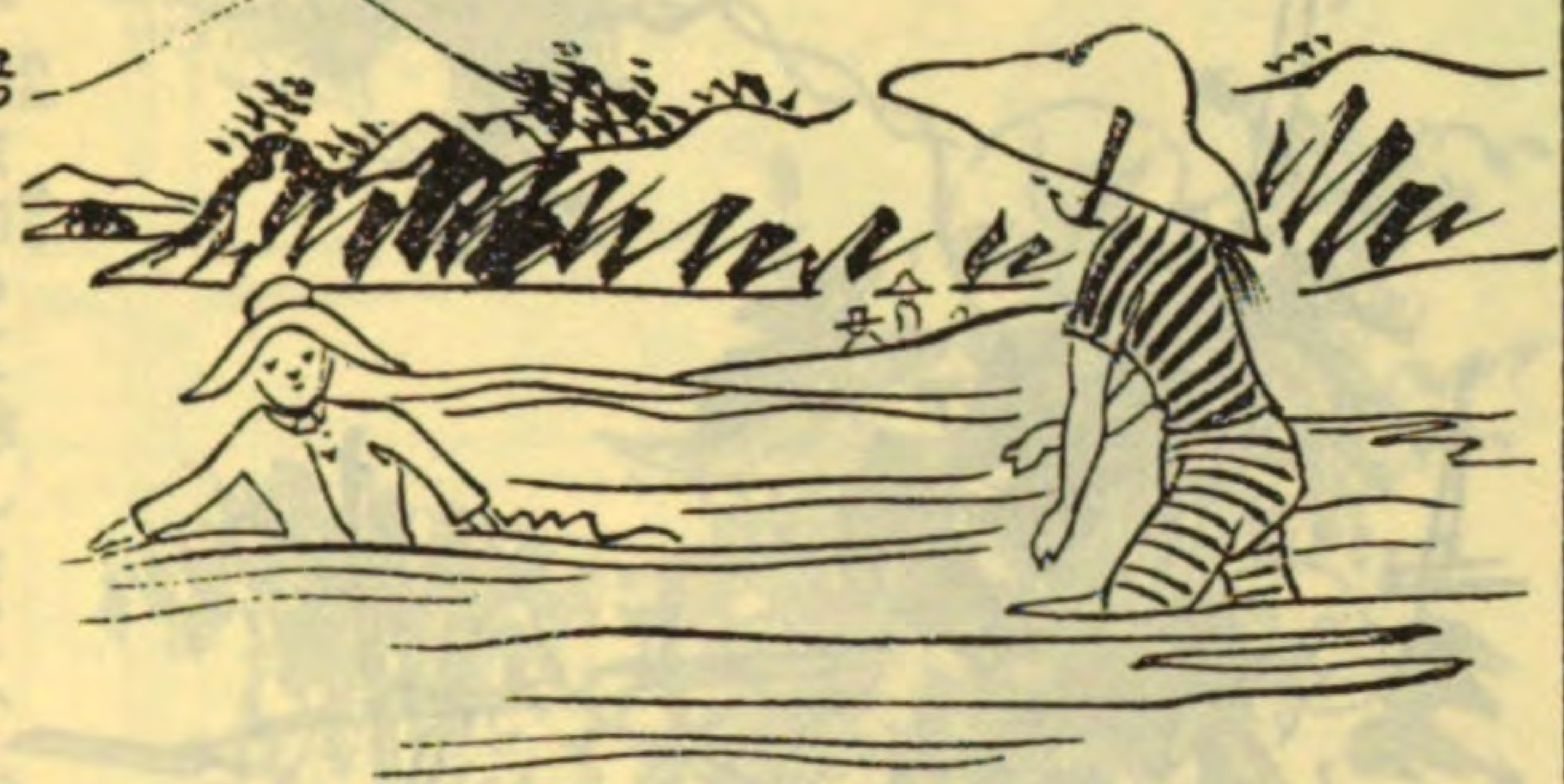


乘りて壇溪を越ゆるの章と張飛策を誤まりてかへるとの二つなり、玄德からふじて脱しかへる途すがら、草苅の小童さも餘念なき有樣を見て是を羨やみ、己れ中山靖王の裔と生れ來し事を恨む是前者の骨にして功名よりも寧安き家庭を思ふの情を表はせり、後者は張飛策を誤まりて當に軍法に



處せられんとすると、玄德おのが身にかへて是を救ふ、眞情讀來れば紙に聲あり、義兄弟の赤心左もあるべし。

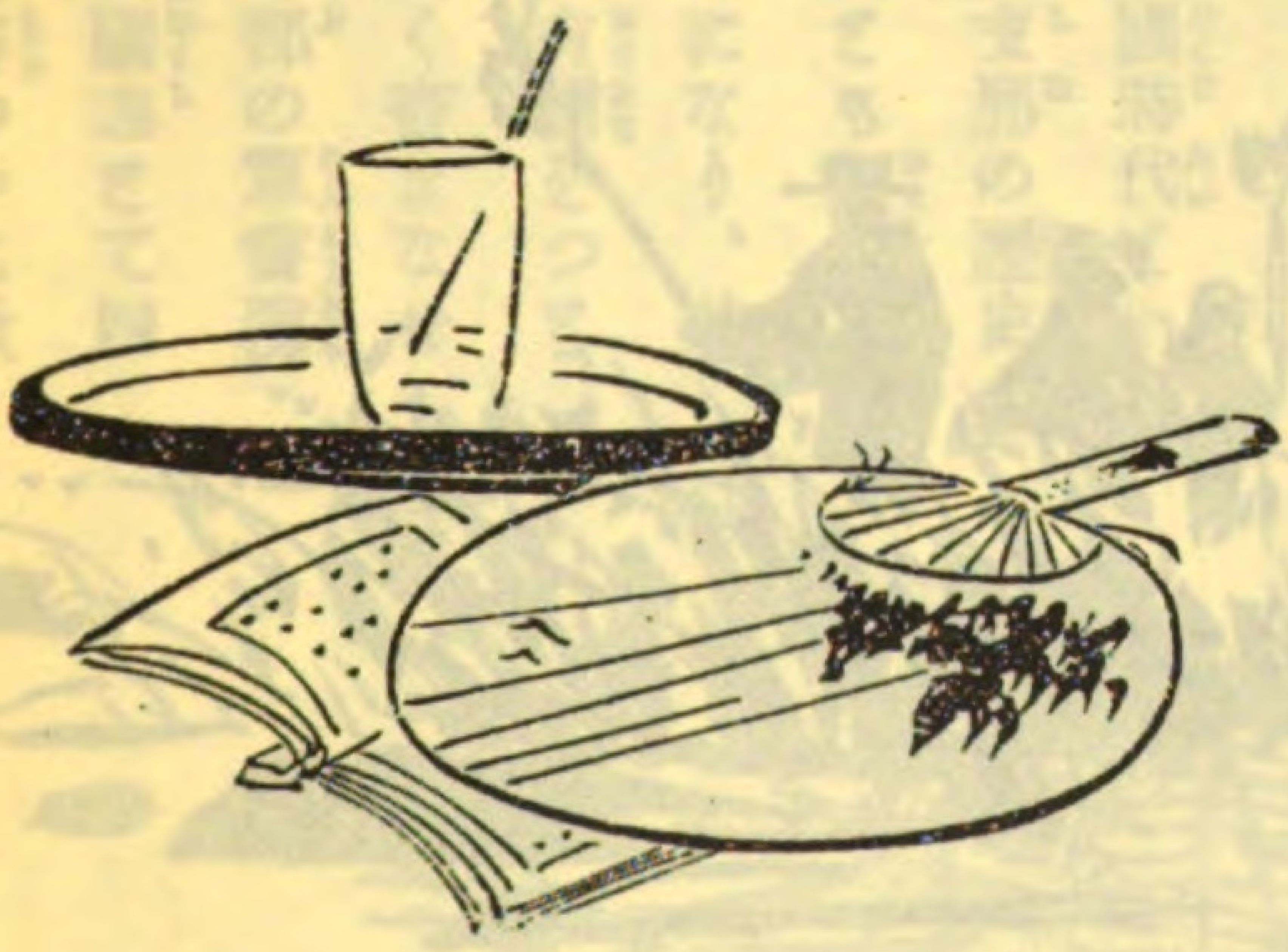
大唐の代の名僧、三藏法師玄奘勅命を奉じて印度に赴むく、はからずも惡き病に犯されて驛路に寐す、從



者其近傍をたづねて名ある醫者をともなひ來る、醫者一診して藥を與ふるも三藏はこれをふくせず、唯々いかにもして我大唐の地に出來しものをこを食んと欲すと、ひたすらにこれを求めて止まず、從者止むを得ず、態々はるけき道をかへり、種々求め來りてすゝめしに三藏は此上もなく是を喜こび、病もために癒へしとぞ、書るされて或書にあり、さるを或似非解脫の俗僧ども、執着の念深き三藏かなと非難せり、

余は大いに却つて三藏の優にやさしき心を愛す。

◎悪童子親の手にもあはず、捨つるがごとく印度に追れしロードクライブ、世に目覺しき大活劇を演じたる不世出の英雄も今一度故鄉マンチエスターを見れば余が終生の望は足ると手紙に書き、又其片腕となりて働らぎしワーレンヘスチングスは功なりて後故鄉デリースホードに餘年を送れり、故園それかくまでにたのしきものか。



◎それにつけても尤とも悲

しむべきはポンチン一世の終焉なり、身はさすらひとなりて數千里の遠きにあるも心は常に戀しき故國の空に通へり病いよ／＼篤くなるゆゑ、今ぞ末期と見えし



時、侍者其言んと欲する所を問ふ、其時にナポレチンは雨眼に淚をたゝへ、フランス、フランスと唯二言をいふて眠れり、此二言注釋せばまさに數卷の大部ともなるべし。」

◎西南の役、今の山縣大將に從がつて戰地にありし或有爵の人、余に語りたまひし事あり、西郷の末路ほど悲しむべく、然もまたやさしきものはなし、事中途に敗れ策いよ／＼盡きて今や如何ともすること能はず、群下あるいは飽までも踏とゞまりて官軍にむかひ、城を枕に討死せん、よしや一足半歩たりとも敵にうしろを見すべきならずと、流石はやり雄の薩摩男子口角沫を飛して論ずるも大西郷は是をきかず、種々樣々と彼等を說きふせ、敗餘うち萎れたる一隊をひきひて十重廿重の圍をきりぬけ、犬馬の肉を生食しつゝ、辛ふじて故郷薩摩國にかへり、城山の地に於て破顏一番莞爾として屠腹せりと其辭世の詩

孤軍奮鬪破レ圍還　一百里程絕壁間
吾劍已摧吾馬倒　秋風埋レ骨故郷山

此談をきゝし以來一段の趣味をまさせり、就中其結句に於て然るを覺ゆ。

歌苑

。撫子　　名古屋　まこと

夕霧にぬれて色そふ撫子の花は八汐のにしき也けり

、、、池蓮　　　名古屋　まこと
夕まくれ風にみたれてしら露のかをるも涼し池の蓮葉
、、、窓前竹　　同
窓近き竹の繁みを見るからに心そことに涼しかりける
、、、惜別　　同
逢は又別るゝものとしりなから今日の名殘の惜るゝ哉
四首共によくきこえたれと新らしき趣なし
、、椿　　名古屋　ともゑ
起出るわか床夏の朝露にからくれなゐの色そ榮ある
、。池蓮　　同
むら雨のすきにし跡の夕風に涼しくかをる池の蓮かな
、。撫子　　坂口信正
日にそへて色まさり行く撫子の花にはえある庭の面哉
、、撫子　　同
外國の人も色香をしたふらん名も敷島のやまと撫子
そへてさいふへき格なり
。。池蓮　　同
世のちりに染まぬを花の心そと池の蓮は咲いてにけん
、。池蓮　　同
日に添て濁り行く世を忍はすの池の蓮の花さきにけり
、、、窓前竹　　同
一ふしの名をあけなんと思ふ身の明暮めつる窓の竹叢
、、窓前竹　　同
夕立はやかてきぬらんまと近き竹の林に風さわくなり
雑の題に夕立なと四季のものをよみいるゝは多くはわろし
、、、惜別　　同
引止むる人の袂は放ちてとも引るゝ心いかにかはせん
、、撫子　　耕雲迂農
山かけの岩根にねさし淡くこく咲こそまされ大和撫子
しき島のより岩根にはつゝきかたし
、、窓前竹　　同
呉竹も里のふせやの窓ちかく樂しきふしの影をそへ鳥

、。惜別　　耕雲迂農
和歌の浦君に別れて迦なはひとり道にやふみ迷ふらん
やはゝ意味のかへろてにはにてこゝには用ひかたし
、、池蓮　　初見きみ子
見渡せは野澤の末の池水にけさゝき初めしはな蓮かな
。。撫子　　同
たらちねの深き惠の露をうけ大和撫子花咲にけり
まつろさいふ詞こゝにはふさはしからす
、。惜別　　同
別れ行く涙間の船を見つゝをれは袖寒きまて浦風そ吹
、、、池蓮　　在阪　佐藤渦心
朝な〳〵こほす蓮の露よりやかほりみつらむ庭の池水
もさの上句やさいひさかなさは結ひかたし
、。撫子　　同
うすくこく庭の撫子咲出てゝ競へる色のあはれなる哉
、、窓前竹　　同
假初めに植にし竹の育ちつゝ窓の涼しき影となりけり
四句調つまれり
、、撫子　　大田紅松
日數へて生し立てたる撫子のなてまほしくも美しき哉
、、池蓮　　同
池の面は蓮の花の咲きみちて月さへ匂ふ夜頃なりけり
二句結句共に猶あるへし
、。窓前竹　　同
心あへる友と語らふ窓のもと竹の葉みだし夕風の吹く
やすらかなり

社告

歌苑次回課題
避暑　納涼　夕立　古寺

本社電話番號七十番

發行兼印刷人　吉崎圓吉
編輯人　金子佐平

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　家庭雜誌社

明治廿五年九月十四日遞信省認可

家庭雜誌

○毎月二回十日廿五日發兌

定價 一冊金五錢 郵税 地方 金五厘

半年(十二冊)前金五十錢 共金五十六錢

一年(廿四冊)同金一圓 共金一圓十二錢

○廣告料一行(廿四字詰一回ニ付)金八錢

○本誌御注文ハ前金爲替向所ハ芝口郵便支局

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地 株式會社秀英舍印行